王寺町文化財調査報告書　第17集

西安寺跡第10次
発掘調査報告書

2022. 3

王寺町

西安寺跡第10次

発掘調査報告書

序

王寺町は、奈良県の西の玄関口としていちはやく鉄道が開通し、王寺駅を中心に交通の町として発展してきました。大和川、葛下川や明神山などの水と緑に恵まれた自然豊かな町です。

町内には、聖徳太子が達磨大師と出会い、助けたという片岡飢人伝説を創建由緒とする達磨寺があります。この達磨寺には、国指定重要文化財「木造聖徳太子坐像」、聖徳太子の愛犬とされる町指定文化財「石造雪丸像」など聖徳太子にかかわる貴重な文化財が残されています。

奈良県指定史跡の西安寺跡は、飛鳥時代建立の古代寺院跡で、聖徳太子建立の46カ寺の一つとも伝えられています。この西安寺跡の発掘調査は、2019年度に作成しました「王寺町文化財保存活用地域計画」に基づき、文化財を掘り起こす事業として実施しています。将来、史跡整備を行い、調査の成果を皆様にご覧いただけるよう計画しております。

最後になりましたが、調査の実施にご協力くださいました土地所有者様をはじめ、文化庁、奈良県文化財保存課など、関係各所の皆様に御礼申上げます。

2022年3月

王寺町長

平井　康之

例　言

1．本書は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸２丁目4189番地内において実施した西安寺跡第10次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010年改訂版）10Ｂ－0001として登載されている。

2．調査は王寺町が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町　町長　平井康之
	地域整備部参事　前田日出高
	地域交流課　文化資源活用係長　岡島永昌　同主任　梅野麻衣子
	同主事　清川正治（～2021.3）　同会計年度任用職員　岡島颯斗（2021.4～）
調査担当者	同主事　寺農織苑（～2021.3）
	同会計年度任用職員　櫻井恵　福井彩乃
遺物整理	同会計年度任用職員　青木佐和
発掘作業	株式会社春山組
測　量	株式会社アクセス
調査協力・助言	宗教法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、乾将太朗、上田喜江、上原眞人、大西貴夫、奥田尚、小田裕樹、甲斐弓子、北川咲子、黒濟玉恵、近藤康司、狭川真一、清水昭博、下大迫幹洋、白木原僚太、鈴木嘉吉、関川尚功、塚口義信、西垣遼、箱崎和久、馬場基、平田政彦、平林章仁、山下隆次、吉村公男、吉村武彦（五十音順、敬称略）
	西安寺跡史跡整備活用委員会（2017.2.17設置）
	前園実知雄、大脇潔、山岸常人、東野治之、仲隆裕、光石鳴巳、中川忠儀（敬称略）

3．本書で使用している座標数値は世界測地系、水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4．土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖23版』に拠った。

5．図２は国土地理院発行の1/50,000地形図大阪東南部（昭和59年７月30日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010年改訂版）、図３・17は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）をもとに作成した。

6．石材の同定は奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員奥田尚氏による。

7．出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町において保管している。

8．遺物の撮影は岡島永昌、写真図版の作成は福井彩乃、本書の執筆編集は櫻井恵が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに ---------- 1

第２章　調査の内容 ---------- 5

第３章　まとめ ---------- 20

挿　図　目　次

図１　王寺町の位置
第１章　はじめに
図２　周辺の遺跡（1/50,000）
図３　調査位置図（1/1,000）
第２章　調査の内容
図４　１トレンチ出土遺物実測図
図５　１トレンチ平面図・土層断面図（1/50）
図６　２トレンチ検出遺構平面図・
東壁土層断面図・基壇外装立面図（1/50）
図７　２トレンチ検出遺構平面図（1/50）
図８　２トレンチⅢ層出土遺物実測図１（1/4）
図９　２トレンチⅢ層出土遺物実測図２（1/4）
図10　２トレンチⅢ層出土遺物実測図３（1/4）
図11　２トレンチⅢ層出土遺物実測図４（1/6）
図12　２トレンチⅢ層出土遺物実測図５
図13　２トレンチⅣ層出土遺物実測図１（1/4）
図14　２トレンチⅣ層出土遺物実測図２
図15　２トレンチⅤ層出土遺物実測図
第３章　まとめ
図16　塔検出遺構平面図・基壇外装立面図・
復元図（1/200）
図17　伽藍想定図（1/500）

写　真　目　次

写真図版１　１トレンチ
調査前（東から）
地山検出状況（東から）
北壁・東壁土層断面（南西から）
写真図版２　２トレンチ
調査前（北から）
Ⅲ層堆積状況・炭化材１検出状況（南西から）
Ⅲ層炭化材２検出状況（北東から）
写真図版３　２トレンチ
Ⅳ層検出状況（北から）
Ⅳ層検出時の基壇外装（南から）
Ⅴ層検出状況（北から）
写真図版４　２トレンチ
基壇外装検出状況（東から）
基壇外装検出状況（南から）
写真図版５　２トレンチ
遺構検出状況（北西から）
写真図版６　２トレンチ
回廊基壇・雨落溝検出状況（北西から）
回廊基壇・雨落溝検出状況（北から）
写真図版７
１トレンチ・２トレンチⅢ層　出土遺物
写真図版８
２トレンチⅢ層　出土遺物

写真図版９

２トレンチⅢ層　出土遺物

写真図版 10

２トレンチⅢ・Ⅳ層　出土遺物

写真図版 11

２トレンチⅣ層　出土遺物

写真図版 12

２トレンチⅤ・Ⅲ層　出土遺物

写真図版 13

２トレンチⅢ～Ⅴ層　出土遺物

写真図版 14

２トレンチⅢ層　出土遺物

図１　王寺町の位置

第１章　はじめに

１　位置と環境

地理的環境　西安寺跡が所在する奈良県北葛城郡王寺町は、奈良県の北西部、奈良盆地の河川の水を集める大和川の左岸に位置している。東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市、大和川をはさんで北に三郷町、斑鳩町が隣接し、西は大和川が大阪平野へと流れ出る亀の瀬で大阪府柏原市と接しており、大阪と奈良の府県境となっている。

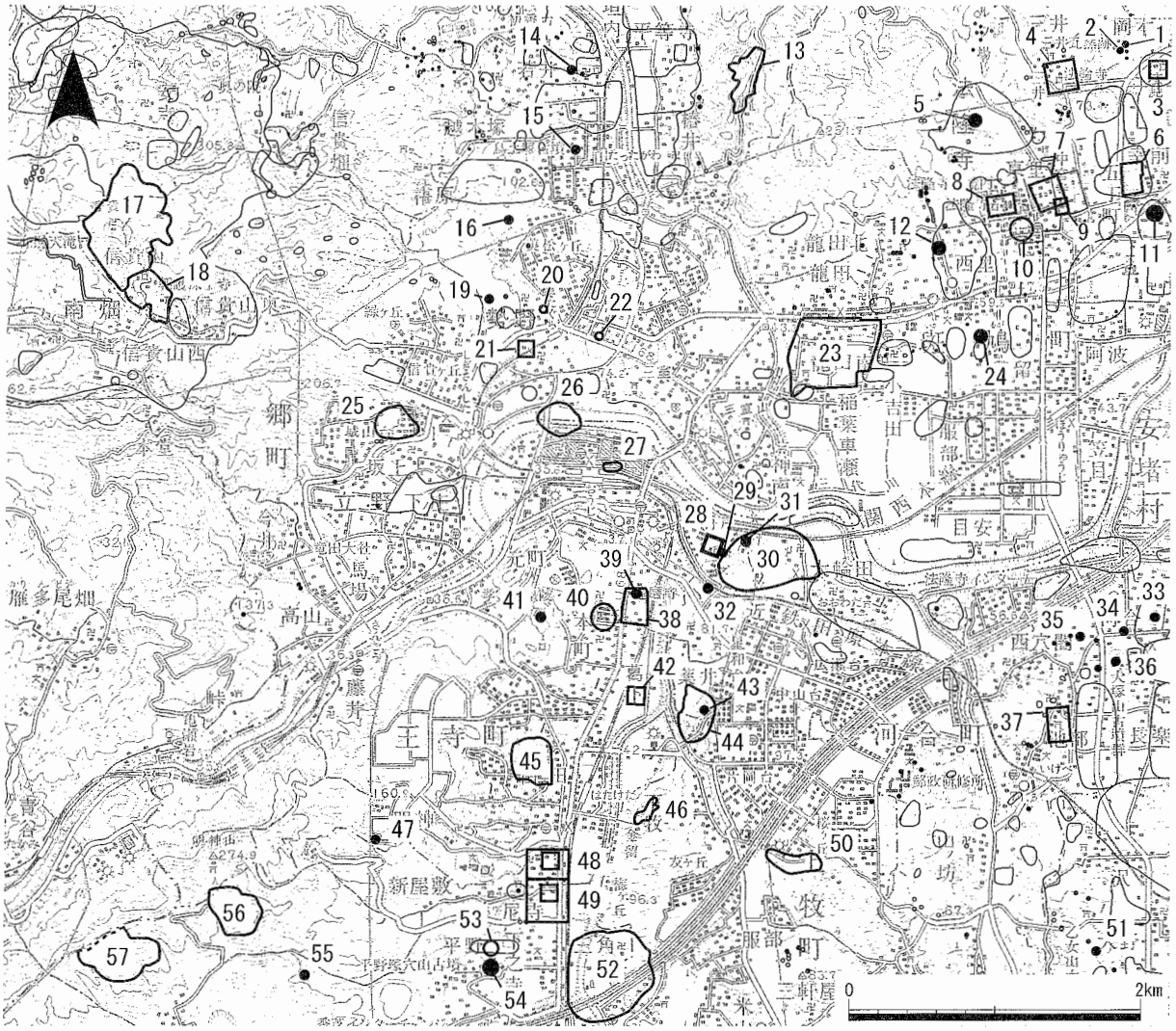
王寺町の地形は、河合町から延びる馬見丘陵の先端にあたる大阪層群からなる東部丘陵、大和川と町域を南から北へ流れる葛下川の沿岸に沖積層が堆積する東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地との漸移地帯で、大阪層群からなる西部丘陵にわけられる。西安寺跡は、王寺町の北東部に位置しており、東部丘陵にあたる標高約 80 mの舟戸山の西麓、舟戸山から延びる谷筋がひろがる傾斜地に立地する。

西安寺の堂塔の遺構が残る舟戸神社の境内は、周囲の土地から１～２m程度高く、最高所の標高が約 45.5 mある。東側は舟戸山からの傾斜を利用した耕作地が広がり、隣接地には水田が営まれる。境内の西端には、南北方向に流れる水路があり、この水路を境に 1.5 m程下がった西側は、そのまま緩傾斜となって、住宅地が広がる。この辺りは、昭和 40 年代に住宅開発されるまでは水田が営まれていた。南側には標高 67.5 mの丘陵を造成した小学校が設置されている。神社の北方約 250 mは大和川の河畔となっており、その間には、享保７年（1722）に築造にされ、字名から「西安寺池」と呼称されていた舟戸新池がある。

歴史的環境　西安寺跡（28）の東方にある舟戸山の山頂は奈良盆地を一望し、大和川の流れを見下ろすことができる場所である。舟戸山から河合町大輪田の西岡一帯に舟戸・西岡遺跡（30）があり、これまでに弥生時代後期の住居址と古代の掘立柱建物跡が検出されている。また、舟戸山の最高所には古墳状隆起（31）が認められ、古墳時代中期以前の古墳である可能性が指摘されるが、時代が下るものであれば、西安寺との関連を考えることができる。舟戸山の西麓には、西安寺所用瓦を焼いたとされる西安寺瓦窯（29）があるが、すでに住宅地となっており、瓦窯跡は確認できず詳細は不明となっている。

推古天皇９年（601）聖徳太子の斑鳩宮の造営が行われたことを契機として、斑鳩と大和川、葛下川の流域では多くの古代寺院が建立され、飛鳥京についで寺院の集中する地域となっている。聖徳太子が住まう斑鳩では、法隆寺若草伽藍跡（10）が７世紀初頭に、中宮寺跡（６）・法起寺（３）・法輪寺（４）が７世紀前半に、法隆寺西院伽藍（８）が７世紀後半から末に創建されている。古来から奈良盆地と河内平野を結ぶ経路である大和川の沿岸では、平隆寺跡（21）が７世紀前半、長林寺跡（37）が７世紀半ばから後半の創建とされている。また、西安寺跡の西方には斑鳩と当麻方面を結ぶ街道がある。中近世には、当麻道とよばれる法隆寺から達磨寺を通り当麻寺へと至る道で、推古天皇 30 年（622）に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある磯長墓まで運んだ「聖徳太子葬送の道」として聖徳太子信仰の一つとなっている。この街道沿いでは、片岡王寺跡（40）が７世紀前半に、尼寺北廃寺（48）・尼寺南廃寺（49）が７世紀半ばから後半に創建されている。このように、斑鳩からつながる道に沿ってこの地域の古代寺院は建立されており、なかでも西安寺跡は、大和川と当麻道が交差する位置にある。

西安寺の中心伽藍がある舟戸神社の創立は不詳であるが、舟戸地区の氏神として今も地元の人々の参拝が絶えることがない。境内にある手水鉢には嘉永元年（1848）、灯籠には嘉永３年（1850）の銘があることから、江戸時代後期には境内は整えられていたことだろう。祭神は天児屋根命と久那戸大神である。久那戸神は岐神、道祖神、賽の神と同じく道路や旅人などを守る神である。舟戸地区は、近世の王寺村の集落の一つで「船渡組」と表記され、当麻街道において大和川を渡る「渡し船」との関係が伺える。交通の要衝である地を守護するために勧請されたと考えられ、舟戸神社が北入りで、本殿も北向きに建てられているのは、大和川を意識してのことだろう。



1 瓦塚１号墳　2 三井瓦窯跡　3 法起寺境内　4 法輪寺旧境内遺跡　5 仏塚古墳　6 中宮寺跡　7 斑鳩宮跡　8 法隆寺西院　9 法隆寺東院
10 若草伽藍跡　11 駒塚古墳　12 藤ノ木古墳　13 椿井城跡　14 西宮古墳　15 烏土塚古墳　16 今池瓦窯　17 信貴山城跡　18 信貴山朝護孫子寺
19 辻ノ垣内瓦窯跡　20 上ノ御所瓦窯　21 平隆寺跡　22 勢野茶臼山古墳　23 龍田城跡　24 斑鳩大塚古墳　25 立野城　26 久度遺跡
27 久度南遺跡　**28 西安寺跡**　29 西安寺瓦窯　30 舟戸・西岡遺跡　31 古墳状隆起　32 岩才池北古墳　33 城山古墳　34 丸山古墳
35 高山塚１号墳　36 川合大塚山古墳　37 長林寺跡　38 達磨寺旧境内　39 達磨寺古墳群　40 片岡王寺跡　41 馬ヶ脊城跡　42 寺院推定地
43 薬井瀧ノ北遺跡　44 香滝・薬井遺跡　45 畠田城跡　46 片岡城跡　47 畠田古墳　48 尼寺北廃寺　49 尼寺南廃寺　50 下牧瓦窯跡
51 池上古墳　52 木辻城跡　53 平野窯跡群　54 平野古墳群　55 今泉古墳　56 送迎山城跡　57 七郷山城跡

図２　周辺の遺跡（1/50,000）

2　調査の契機と経過

西安寺跡の概要　西安寺跡は、飛鳥時代に建立された古代寺院跡で王寺町舟戸２丁目に所在する。塔・金堂の遺構が残る舟戸神社境内は、平成31年（2019）２月22日に奈良県指定史跡に指定されている。西安寺跡は、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏によって周知され、保井氏は、『大和上代寺院志』の中で文献にみられる西安寺（一名久度寺）は、「西安寺」の字名が残る舟戸神社に主要建造物があると考え、採集された飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦、軒平瓦等を報告している。石田氏は、境内の径約５間位の不整形の輪郭で隆起する場所に注目し、現存する狛犬の東方３間位に径１間以上の礎石があり、その礎石面の中央には径２尺余の円形の穴が穿たれていたことを地元の好事家から聞き取った。そして、『飛鳥時代寺院址の研究』の中で、拝殿の北東に塔、本殿の南側の石片の散布する位置に金堂があると推定した。また、周辺の地形と神社の西方約30ｍの田地に「門脇」「馬場脇」との俗称が残ることから、西安寺は西面する法隆寺式伽藍配置の寺院と考えた。現在でも舟戸神

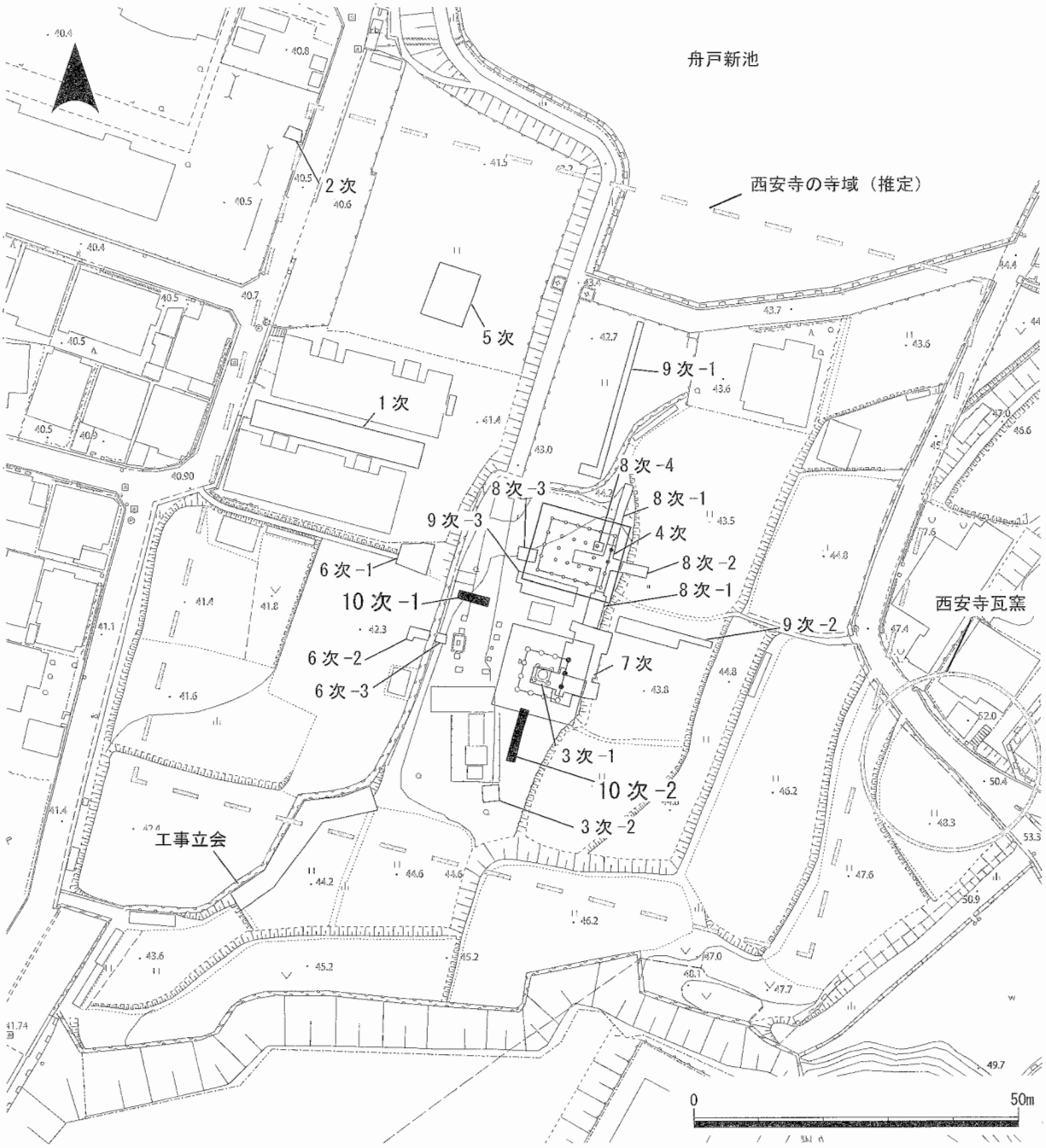


図３　調査位置図（1/1,000）

社周辺には瓦の散布があり、舟戸神社境内を中心とした東西約 110 m、南北約 120 mの範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地とされている。

西安寺は、『続日本後紀』の天長 10 年（833）条に初めて文献にあらわれ、一名を久度寺と記される。創建時の記録は残っていないが、仁安３年（1168）の「大和国大原吉宗田地売券」に「広瀬郡久戸十条寺岡一里卅五坪西安寺」にある田地四段は大原吉宗先祖相伝の所領と記されること、西安寺跡の西方の王寺町久度には、西安寺の別名と同一の久度神社（延喜式内社）があり、祭神の一つである久度神は、かまどの後方の煙だし部分を神格化したカマド神として渡来系氏族が奉斎するもので、久度一帯には渡来系氏族が居住していたと考えられることから、平林章仁氏は渡来系氏族の大原史氏が創建者との見解を示している。また、弘安５年（1282）に行賢が著わした『簡要類聚鈔』によって、鎌倉時代には西安寺が興福寺一乗院の末寺であったことがわかり、貞和３年（1347）に興福寺造営料を納めた記録が残っている。

既往の調査　これまで、９次の発掘調査が行われている。第１次調査は昭和 59 年（1984）度に奈良県立橿原考古学研究所によって行われた。集合住宅の建設に伴って実施されており、調査区の西端で検出された南北方向の溝は、西安寺の西端の築地の溝と考えられている。その後の調査は、王寺町で行っている。第２次調査は平成 26 年（2014）度に包蔵地の北西部に隣接する位置で計画された宅地開発によるものである。西安寺にかかわる遺構、遺物は確認されず、寺域から外れた場所と考えられる。同年度、保井氏、石田氏が塔跡と示した位置で、遺跡範囲確認調査として第３次調査を行い、塔跡を確認した。翌年度の第４次調査では、塔跡の北側に版築で構築された基壇と礎石を検出し、金堂跡と推定している。平成 28 年（2016）度に実施した第５次調査は舟戸神社の北西で計画された個人住宅建設に伴うもので、舟戸神社から地盤が一段下がるものの、西安寺の関連遺構と考えられる中世の整地土、地山上では柱穴等を検出した。同年度の第６次調査は遺跡範囲確認調査として神社西端と西側に隣接する畑地を調査し、関連遺構を検出している。

第３～６次調査によって、舟戸神社とその周辺では、西安寺の遺構が良好な状態で残ることを確認できたことにより、王寺町では、西安寺跡を貴重な文化財として保存･活用することとし、年次的に発掘調査を進めるため、平成 28 年（2016）度に西安寺跡史跡整備活用委員会を組織した。平成 29 年（2017）度の第７次調査では、改めて塔跡の調査を行っている。第３次調査の成果と合わせて、心礎の抜取穴と四天柱の礎石を含む礎石抜取穴５基、側柱の礎石３個、乱石積基壇外装を検出した。残る礎石から建物の初層は一辺が 6.75 ｍであること、創建瓦の年代と心礎が地上式であることから７世紀末から８世紀初頭を創建時期としている。平成 30 年（2018）度の第８次調査では、第４次調査で確認した基壇建物の調査を行った。南、北、東の三面で乱石積基壇外装、基壇上では２個の礎石、５基の礎石抜取跡を検出し、東西方向に桁行５間、南北方向に梁行４間の金堂跡であることが判明し、塔、金堂が直線上に並ぶことから、西安寺跡は四天王寺式伽藍配置の寺院と考えられるようになった。また、この調査で出土した素弁蓮華文軒丸瓦と若草伽藍の金堂修理瓦の同笵が確認され、従来、指摘されるように西安寺の創建が飛鳥時代前半に遡ることが裏付けられている。

令和元年（2019）度の第９次調査では、金堂の南面基壇外装、舟戸神社の北、東側の水田で調査を行っている。東側の水田では東回廊とその雨落溝、北側の水田では版築状に盛土された整地が広い範囲で行われていることを確認し、その整地土上では木製燈籠と思われる柱根と直線上に並ぶ柱穴を検出している。そして、これまでに検出した遺構の配置から西安寺の伽藍中軸線を確定させ、金堂基壇は東西 14.07 ｍ、南北 12.18 ｍ、建物は桁行 10.2 ｍ、梁行 8.28 ｍと推定している。また、東回廊の外側雨落溝を伽藍中軸線で折り返して推定した西回廊外側雨落溝の位置が舟戸神社の西端の水路に重なり、西安寺の区画が今日に残っているものと考えられる。

調査の目的と経過　第８次調査で西安寺は四天王寺式伽藍配置と推定できたが、西安寺は東側に舟戸山の丘陵があり、南側は丘陵裾がせまり、大和川へ向かう北側、西側は緩やかに傾斜する土地が広がるところに立地することから、南向きの伽藍であるのかという課題が残っていた。第９次調査で、金堂の正面に設置される燈籠と思われる柱根が金堂の北面にあること、金堂の北側に整地された土地が広がり柱穴が並ぶことから、西安寺が大和川を意識した北向きの伽藍とも考えられる。また、西側には後世当麻道といわれる街道も通ることから、石田氏が指摘するように、西入りの伽藍であることも想定できる。

第 10 次調査では、西安寺の伽藍の向きを明らかにすることを目的とし、遺構が確認できていない西回廊と南回廊の推定地を調査し、回廊、門の有無を確認することとした。西回廊の調査は舟戸神社参道に、南回廊の調査は塔跡の南にトレンチを設定した。

調査期間は令和２年（2020）11 月９日から 12 月 17 日である。掘削はすべて人力で行い、遺構を検出し、12 月８日に基準点測量を行った。12 月 13 日には、新型コロナウイルス感染症拡大の対策として、地元住民を対象とした現地説明会を実施し、168 名の参加を得た。埋め戻しは、乱石積基壇外装等の遺構を砂で覆い保護した上で作業を行い、調査を終了した。

第２章　調査の内容

１　1トレンチ

１トレンチは、西回廊と推定される参道から西側の植栽に設定した南北幅 1.5 m、東西長５mの調査区である。金堂基壇と塔基壇の中間地点から１m南寄りの位置で、伽藍中軸線に直交させて設定している。

(1) 層 序

Ⅰ 層　　近現代の参道整備による厚さ 40 cmの整地土。トレンチ西端の植栽部分には腐葉土が堆積し、樹木の根による攪乱を受けている。

Ⅱ 層　　近世の整地土。厚さ約 17 cmで堆積する。瓦とともに染付碗、寛永通宝が出土している。

Ⅲ 層　　中世の整地土。厚さ約 55 cmで堆積する。単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、土師器、黒色土器が出土している。

Ⅳ 層　　古代の整地土上に堆積する小礫混じりの細粒砂～粗粒砂層。南西から北東方向に流れた水成堆積とみられる。瓦、土師器甕が出土した。

Ⅴ 層　　古代の整地土。トレンチの北東角と南壁で堆積を確認した。地山とよく似た細粒砂混じり粘土、シルトが堆積する。トレンチ北東角の地山が窪む所では約 27 cmの厚さがある。

Ⅵ 層　　地山。東端で標高 42.7 m、西端で 42.6 mで検出している。

(2) 検出遺構

地山上で古代の整地土を確認したが、明確な遺構は検出できず、西回廊、門の遺構の手がかりを得ることはできなかった。

(3) 出土遺物

１、２、８はⅠ層、９はⅡ層、３、５～７はⅢ層、４はⅣ層からの出土である。１は口径 5.2 cm、器高 1.0 cm、透明釉のかかった軟質施釉陶器で底面には回転糸切り痕がある。２は土師器皿で口径 7.3 cm、器高 1.2 cm、内外面とも煤が付着し、黒褐色を呈する。３は土師器皿で底部外面に指頭圧痕がある。色調は 7.5YR8/3 浅黄橙色で、口縁に煤が付着している。13 世紀中頃。１～３は灯明皿である。４は土師器甕で口径 13.9cm(復元)、外面は摩滅、内面にはハケ目が残る。飛鳥Ⅲ～Ⅳの頃のものであろう。５は単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦で外縁の形状が三角縁で、中房蓮子１＋４＋８の塔創建瓦である。色調は 2.5Y7/1 灰白色、焼成は良好である。６は中段の弧線が太い三重弧文軒平瓦で、色調は 2.5Y6/1 黄灰色、焼成は良好である。７は弧線幅の均等な三重弧文軒平瓦で、弧線の角は丸みを帯びている。凹面には布目痕があり、凸面の調整はナデである。色調は 5PB5/1 青灰色、焼成は堅緻である。８、９は寛永通宝で、８の裏面は 11 波となっている。

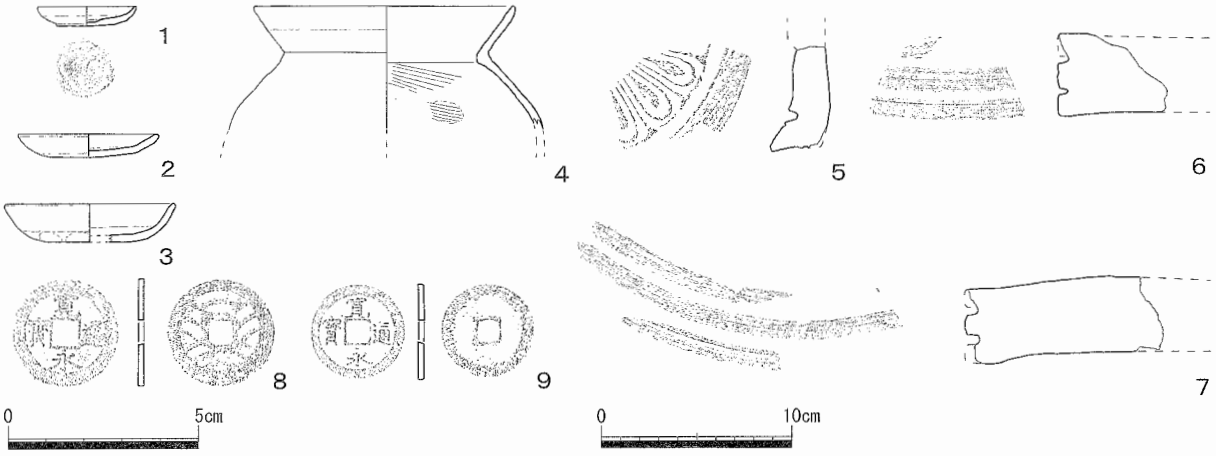
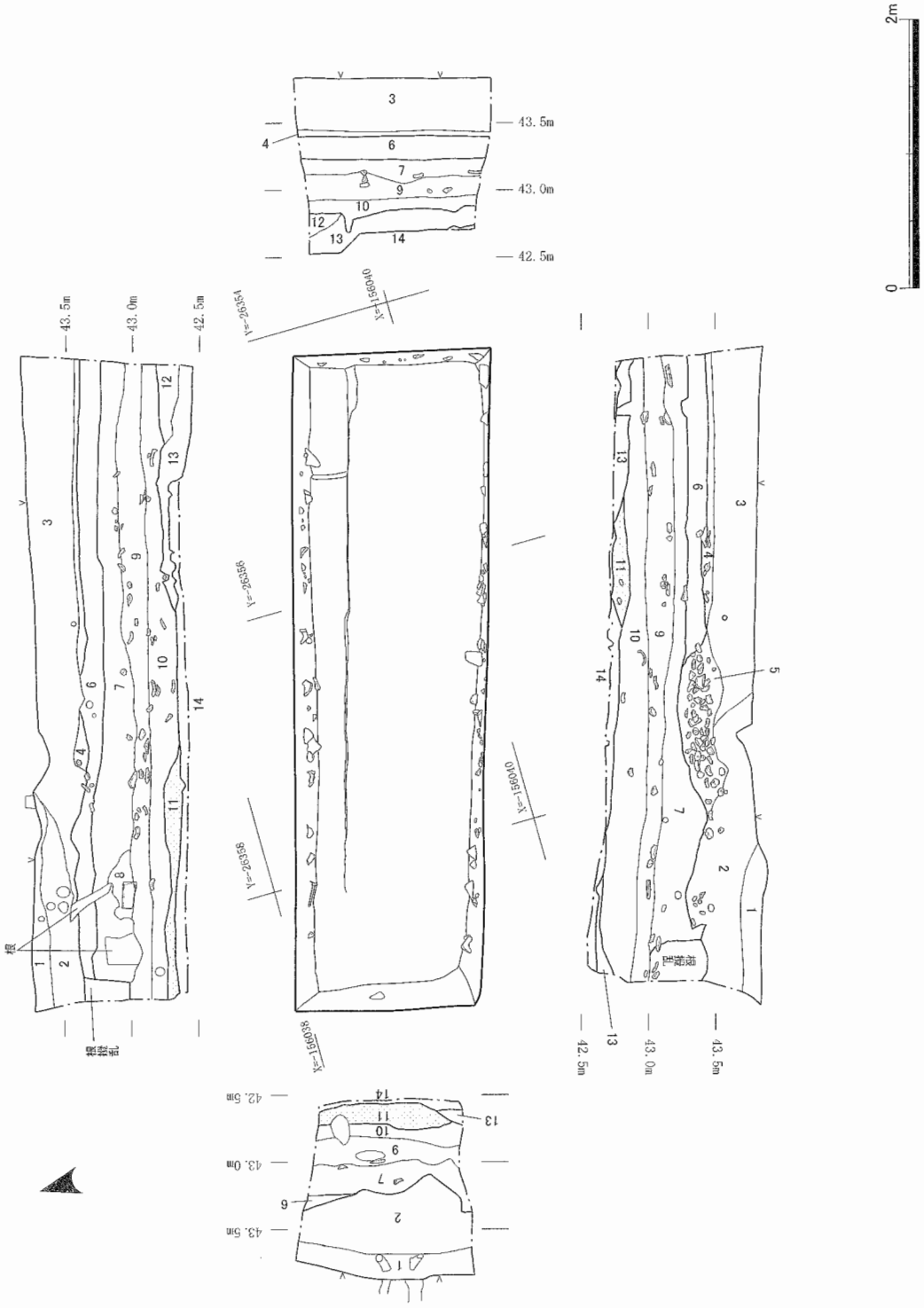


図４　１トレンチ出土遺物実測図（１～７：1/4、８・９：1/2）



1	7.5YR6/6	橙色	粘土	7	7.5YR4/4	褐色	シルト混じり細粒砂
2	7.5YR3/1	黒褐色	細粒砂混じりシルト	8	2.5Y4/3	オリーブ褐色	細粒砂混じりシルト
3	10YR4/6	褐色	シルト～粗粒砂	9	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト混じり細粒砂
4	10YR3/4	暗褐色	細粒砂	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト混じり細粒砂
5	7.5YR4/3	褐色	細粒砂混じり礫	11	10YR5/8	黄褐色	小礫混じり細粒砂～粗粒砂
6	2.5Y4/4	オリーブ褐色	粘土	12	10YR4/6	褐色	細粒砂混じり粘土
				13	10YR4/4	褐色	シルト
				14	10YR4/2	灰黄褐色	細粒砂混じりシルト

Ⅰ層　近・現代
Ⅱ層　近世
Ⅲ層　中世
Ⅳ層　古代～中世
Ⅴ層　古代　整地土
Ⅵ層　地山

図５　１トレンチ平面図・土層断面図（1/50）

2 2トレンチ

2トレンチは、舟戸神社の本殿、拝殿の東側の社叢に設定した調査区である。塔の四天柱西列を延長させた位置で、塔南面の基壇外装から南回廊を推定する箇所に設定した。東西幅1.5ｍ、南北長8.5ｍのトレンチで、調査面積は12.75㎡、遺構面まで約1.8ｍの掘削を行った。

(1) 層 序

Ⅰ 層　現代の腐葉土と近代以降の整地土。東壁で約50㎝の厚さがあり、この層の下部には大量の近世～近代の瓦が堆積している。舟戸神社本殿・拝殿所用の瓦が廃棄されたものである。

Ⅱ 層　近世の整地土。60～70㎝の堆積がある。瓦が多く混入し、近世の灯明皿等が出土した。

Ⅲ 層　中世の焼土混じりの堆積土。トレンチ北半では、塔基壇面から基壇外周に流れ込むような堆積状況で最大70㎝の厚さがある。トレンチ南半では約30㎝の堆積があり、焼土の混ざり込みは北半より少ない。建築部材とみられる炭化した木材、焼土、凝灰岩、銅製品、塔に所用された瓦が多量に出土している。年代が確認できる出土遺物は室町前期の均整唐草文軒平瓦である。

Ⅳ 層　基壇外周の中世の整地土。30～40㎝の厚さで堆積する。トレンチ北半の下部に瓦が集中して堆積する。13世紀後葉～14世紀前葉の瓦器椀、平安後期の均整唐草文軒平瓦が出土した。

Ⅴ 層　トレンチ中央、基壇外周の低い部分に堆積する細粒砂混じりシルト層。外装から約2ｍの位置から回廊の間に堆積し、最大20㎝の厚さがあり、瓦が多く混入している。11世紀末～12世紀前葉の土師器皿、単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦等が出土した。

Ⅵ 層　古代の基壇外周整地土1。基壇外装際では厚さ10㎝で堆積する。外装から離れるに従って除々に堆積が薄くなり、外装から3.7ｍの位置でなくなる。単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦等が含まれる。

Ⅶ 層　古代の基壇外周整地土2。東壁際の断ち割りで20㎝の厚さを測り、外装から2.1ｍの位置にまで堆積する。外装裾では玉石、石材を含み、瓦の破片も出土する。

Ⅷ 層　回廊基壇の整地土。厚さ16㎝の黄褐色シルトが堆積する。表面には乾裂痕が認められる。

Ⅸ 層　地山。回廊付近で標高43.57ｍ、塔基壇下で標高43.28ｍで検出した。表面には乾裂痕が認められる。回廊付近は暗褐色シルト、塔基壇側では褐色細粒砂混じりのシルトで砂質の地山となっている。

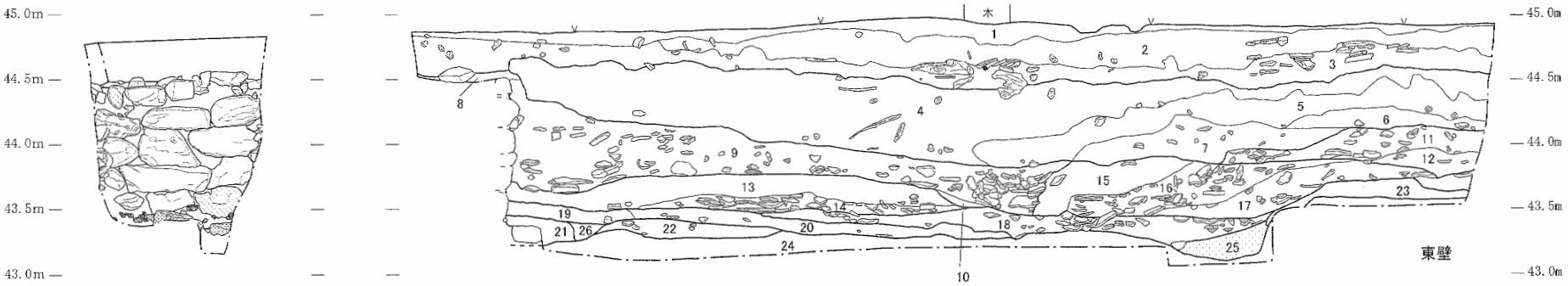
(2) 検出遺構

塔　トレンチ北端で塔南面の乱石積基壇外装を検出した。基壇上面の標高は44.47ｍ、5段の石積みが約1.1ｍの高さで残存している。基壇外装は花崗岩を主体とした石積みで、最上段には表面が平滑に整えられた凝灰岩が並べられている。塔基壇北面（第7次調査）でも同様に凝灰岩が配されていたが、本調査で検出した部分が最もよく残っている。下から3段目の石が大きく前へせり出しており、外装基底の位置は見た目より20㎝程内側にある。トレンチは、塔の中央間にもあたっているが、明確な階段遺構は確認できなかった。

基壇外周では、3度の整地が行われていることを確認した。整地は古代に2回、回廊の内側雨落溝が埋没し、基壇外周にⅤ層が堆積した後に1回行われている。古代の整地は外装裾に施されており、整地土1、2からは、素弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、行基丸瓦等が出土し、それぞれ人頭大の石を検出したが、用途は不明である。また、整地土2からはこぶし大の玉石が出土し、外装基底から南へ60㎝の位置で幅20～30㎝の東西方向に延びる溝を確認した。部分的に白色細粒砂の堆積が認められ、雨垂れ痕跡と考えられる。

回 廊　塔の乱石積基壇外装から南に6.5ｍの位置で東西方向に延びる高まりを検出した。南回廊の基壇である。回廊の北辺には東西方向の溝があり、高さは溝底から60㎝を測る。回廊上面の標高は43.73ｍである。地山上に16㎝の整地土が積まれており、溝を掘削した土を地山に積み上げて築いたものと考えられる。基壇の検出面には柱穴等の遺構はなく、整地土からの遺物の出土はなかった。

1	10YR4/2	灰黄褐色	細粒砂混じりシルト	Ⅰ層 近代～現代
2	10YR5/6	黄褐色	細粒砂混じりシルト	
3	7.5YR3/2	黒褐色	シルト	
4	2.5Y5/6	黄褐色	細粒砂混じりシルト	Ⅱ層 近世整地土
5	10YR5/6	黄褐色	細粒砂混じりシルト	
6	10YR5/6	黄褐色	微粒砂混じりシルト	
7	7.5YR4/6	褐色	微粒砂混じりシルト	
8	5YR2/2	黒褐色	炭、焼土混じりシルト	Ⅲ層 中世
9	5YR3/2	暗赤褐色	焼土、炭混じりシルト	
10	10YR3/3	暗褐色	シルト混じり細粒砂	
11	7.5YR4/2	灰褐色	焼土混じりシルト	
12	5YR4/3	にぶい赤褐色	焼土混じりシルト	
13	2.5Y6/4	にぶい黄色	細粒砂混じりシルト	Ⅳ層 中世
14	7.5YR4/6	褐色	シルト混じり粘土	
15	10YR5/2	灰黄褐色	細粒砂混じりシルト	
16	7.5YR5/4	にぶい褐色	細粒砂混じりシルト	
17	2.5Y5/4	黄褐色	粘土	
18	10YR5/3	にぶい黄褐色	細粒砂混じりシルト	Ⅴ層 古代
19	7.5YR4/4	褐色	シルト混じり細粒砂	Ⅵ層 古代 塔基壇外周整地土1
20	7.5YR5/2	灰褐色	細粒砂混じりシルト	
21	7.5YR3/4	暗褐色	シルト混じり細粒砂	Ⅶ層 古代 塔基壇外周整地土2
22	10YR5/2	灰黄褐色	シルト混じり細粒砂	
23	2.5Y5/3	黄褐色	シルト混じり細粒砂	Ⅷ層 古代 回廊基壇整地土
24	10YR4/6	褐色	細粒砂混じりシルト	Ⅸ層 地山
	7.5YR4/6	褐色	細粒砂混じりシルト	
	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	
25	7.5YR5/1	褐灰色	細粒砂から粗粒砂	雨落溝埋土
26	5YR5/2	灰褐色	シルト混じり粗粒砂	雨垂れ痕跡埋土



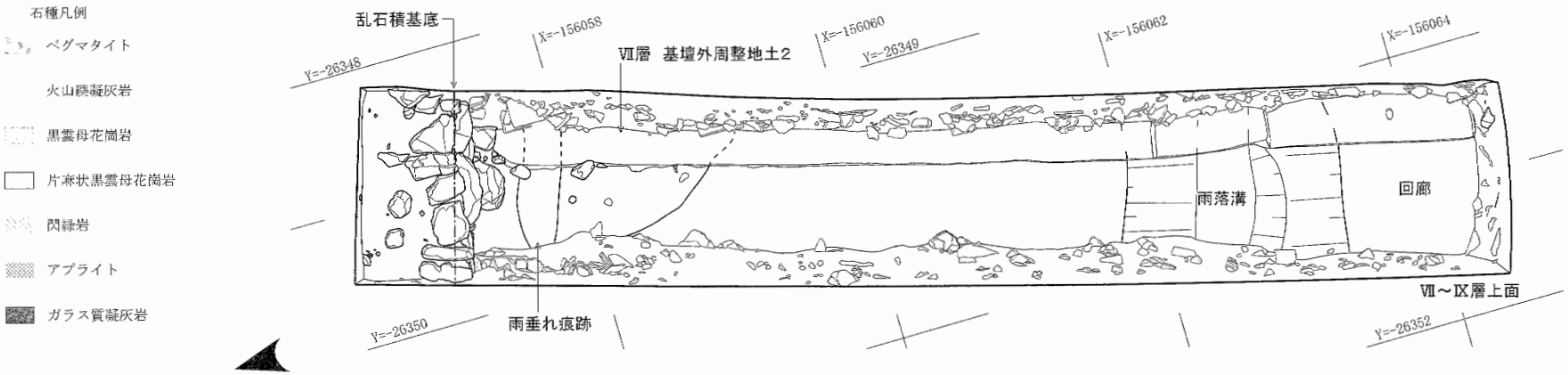


図6　2トレンチ検出遺構平面図・東壁土層断面図・基壇外装立面図（1/50）

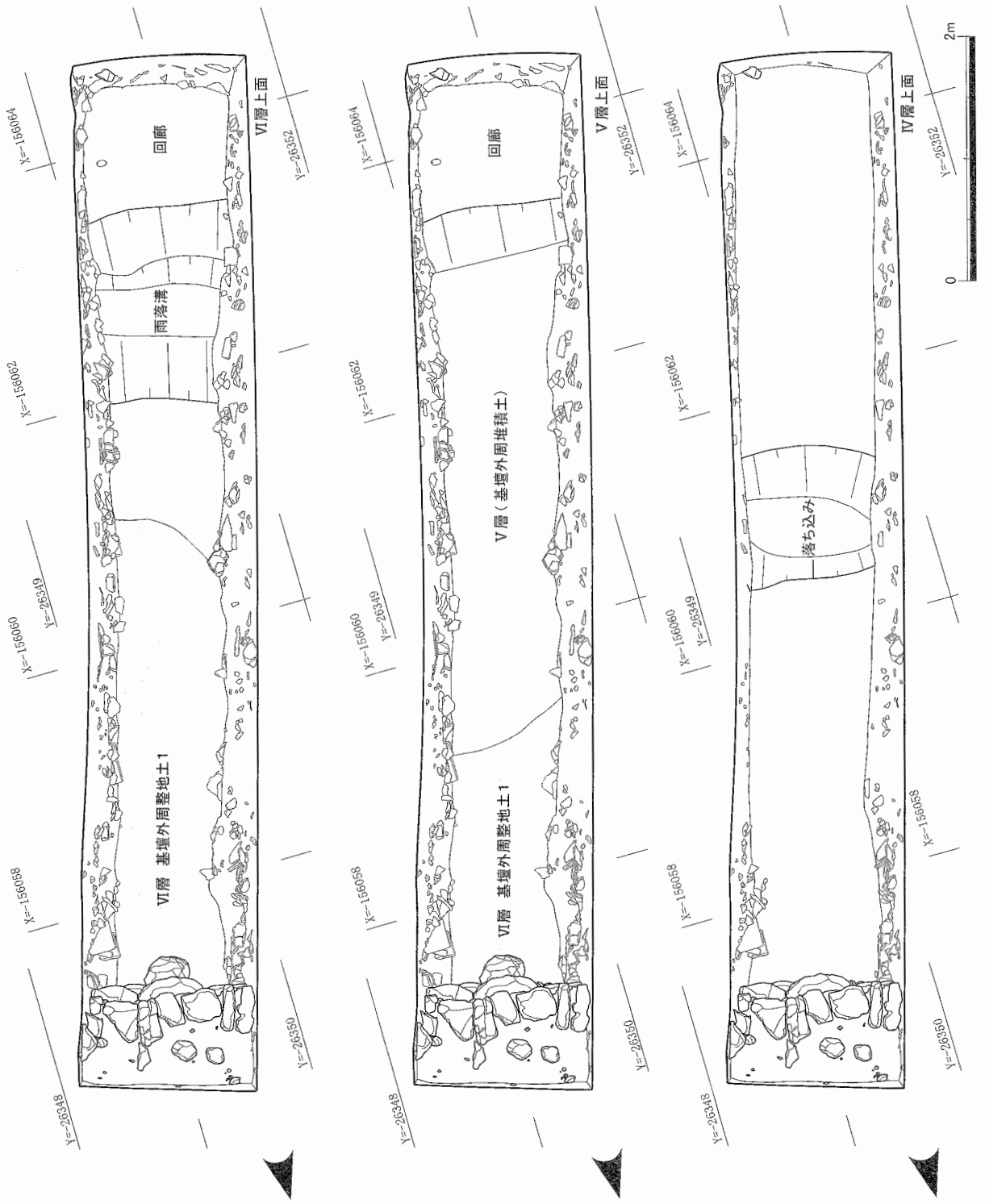


図７　２トレンチ検出遺構平面図（1/50）

雨落溝　　回廊の北辺にある東西方向の溝は、回廊内側の雨落溝である。雨落溝の形状は、回廊側の立ち上がりが垂直に近い急傾斜、塔側は基壇外周から続く緩やかな傾斜となっており、東回廊の内側雨落溝（第８次調査２トレンチ、第９次調査２トレンチ）と同様に塔・金堂付近の水を外側に流すように設計されている。溝内には、灰褐色細粒砂～粗粒砂が堆積し、その幅は約 70cm、厚さは約 20 cm、瓦の小片が１点出土した。

（3）出土遺物

Ⅲ 層　10～12は素弁８弁蓮華文軒丸瓦である。10は中房端の圏線は摩滅しているが、蓮弁の割付と外区溝内に小珠が認められる点から斑鳩７Ａｂと同笵の軒丸瓦である。瓦当の厚さは3.1～3.3㎝、色調はN5/0灰色で焼成は堅緻である。11は蓮弁中央に鎬が通り弁端に小珠がある。瓦当の厚さは蓮弁の厚い所で2.2㎝、色調は2.5Y4/1黄灰色で焼成は堅緻である。12の蓮弁は凸線で縁どられ、弁端が反り返る。幅0.8㎝、高さ0.7㎝の外縁は直立縁で素文である。外縁側面には瓦笵のあたりが段となり残っている。瓦当の厚さは蓮弁の厚い所で1.5㎝を測り、色調は5GY4/1暗オリーブ灰色、焼成は堅緻である。

13～15は、塔の創建瓦である中房蓮子１＋４＋８、外縁が三角縁の単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は16.0～16.4㎝に復元できる。13の中房部分での瓦当の厚さは2.3㎝、瓦当裏面は横方向のナデが施される。丸瓦の接合面で剥離しており、丸瓦の先端に加工がないことがわかる。色調は2.5Y6/1黄灰色、焼成は良好。14の瓦当の厚さは中房部分で3.1㎝あり、瓦当裏面は不整方向のナデ、瓦当側面は外縁に沿ってナデ、丸瓦凸面は縦方向のケズリが施される。色調は2.5GY5/1オリーブ灰色、焼成は堅緻である。15は中房部分での瓦当の厚さが2.2㎝あり、瓦当裏面は不整方向のナデ、瓦当側面下半は外縁に沿ってナデが施される。瓦当裏面は丸瓦との接合面で剥離している。色調は5Y6/2灰オリーブ色、焼成は堅緻である。

16～19は破損した瓦笵を使用した三頭左巻巴文軒丸瓦である。中央に珠点があり、珠文は14個、その珠文帯の内外に圏線がある。これらの瓦は、瓦当径15.6～16.0㎝、瓦当の厚さ2.1～3.0㎝を測る。16は完形品で全長41.2㎝、玉縁長6.2㎝。玉縁部には焼成前に穿孔された釘穴、丸瓦上部には焼成後に穿孔された釘穴がある。丸瓦部の凸面は縄タタキのちナデ消しており、玉縁側には縄タタキの痕が残る。瓦当から玉縁部へ向けて縦方向のヘラケズリが施され、肩部は横方向にナデられる。凹面は糸切り痕、密な布目痕があり、玉縁部狭端と玉縁部から瓦当にかけての側縁は面取りされている。色調は2.5Y6/2灰黄色、焼成は良好である。17の瓦当外縁の内側角は面取りされ、瓦当裏面の上半部は丸瓦の凹面の形状に沿わせたナデ、下半は横方向のナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面には糸切り痕、密な布目痕、指頭圧痕がある。色調は2.5Y5/2暗灰黄色、焼成は良好である。18の瓦当裏面は斜め方向のナデ、瓦当側面下半は外縁に沿ってナデられる。丸瓦部凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面には瓦当を接合する際のナデつけの痕がある。色調はN4/0灰色で焼成は良好である。19の丸瓦部凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面には密な布目痕がある。色調は5Y4/1灰色、焼成は良好である。16～19は珠文帯、外圏線から外縁にかけての笵割れと笵傷の状況から17→18→16→19の順に製作されている。20、21は二頭左巻巴文軒丸瓦で、中央に珠点を配し、16個の小ぶりな珠文が巡る。珠文帯の内外に圏線はない。瓦当径は15.4㎝、瓦当の厚さは20が3.0㎝、21が2.6㎝。20の瓦当裏面上半は縦方向のナデ、丸瓦のとりつき位置から下は横方向のナデ、瓦当側面下半は外縁に沿ったナデを施している。丸瓦凸面には縦方向のヘラケズリ、凹面には糸切り痕、布目痕があり、色調は5Y6/3オリーブ黄色、焼成は良好である。21は外縁の内側角を部分的に面取りし、瓦当側面は外縁に沿ってナデが施されている。瓦当と丸瓦の接合面で剥離しており、丸瓦を瓦当上端から2.5㎝下がった位置に接合している。接合面には指頭圧痕があり、指押さえで接合面を整えている。色調は5YR5/1褐灰色、焼成は良好である。22は三頭左巻巴文軒丸瓦で、中央に直径2.0㎜の珠点、内外圏線に囲まれた珠文帯には27個の珠文が配される。巴の頭はやや尖り、尾は圏線につかない。瓦当径は14.8㎝、厚さは2.7㎝、瓦当側面は外縁に沿ってナデ、丸瓦部凸面は縦方向のヘラケズリが施される。瓦当裏面、丸瓦部凹面の調整は摩滅しており、調整、焼成は不明、色調は5Y4/1灰色である。23は三頭左巻巴文軒丸瓦で、中央に珠点はなく、残存する珠文は14個、復元すれば22個の珠文を有していただろう。珠文帯の内側には内圏線があり、頭のやや丸い巴文の尾は内圏線に接着しない。瓦当面には離れ砂が使用されている。瓦当側面上半部は縦方向のナデ、下半は外縁に沿ったナデである。瓦当裏面は丸瓦の接合面で剥離しており、瓦当上端から2.0㎝下がった位置に強めのナデを施して丸瓦を接着させ、瓦当裏面全体に粘土を貼り付けている。瓦当径は15.7㎝、厚さ2.2

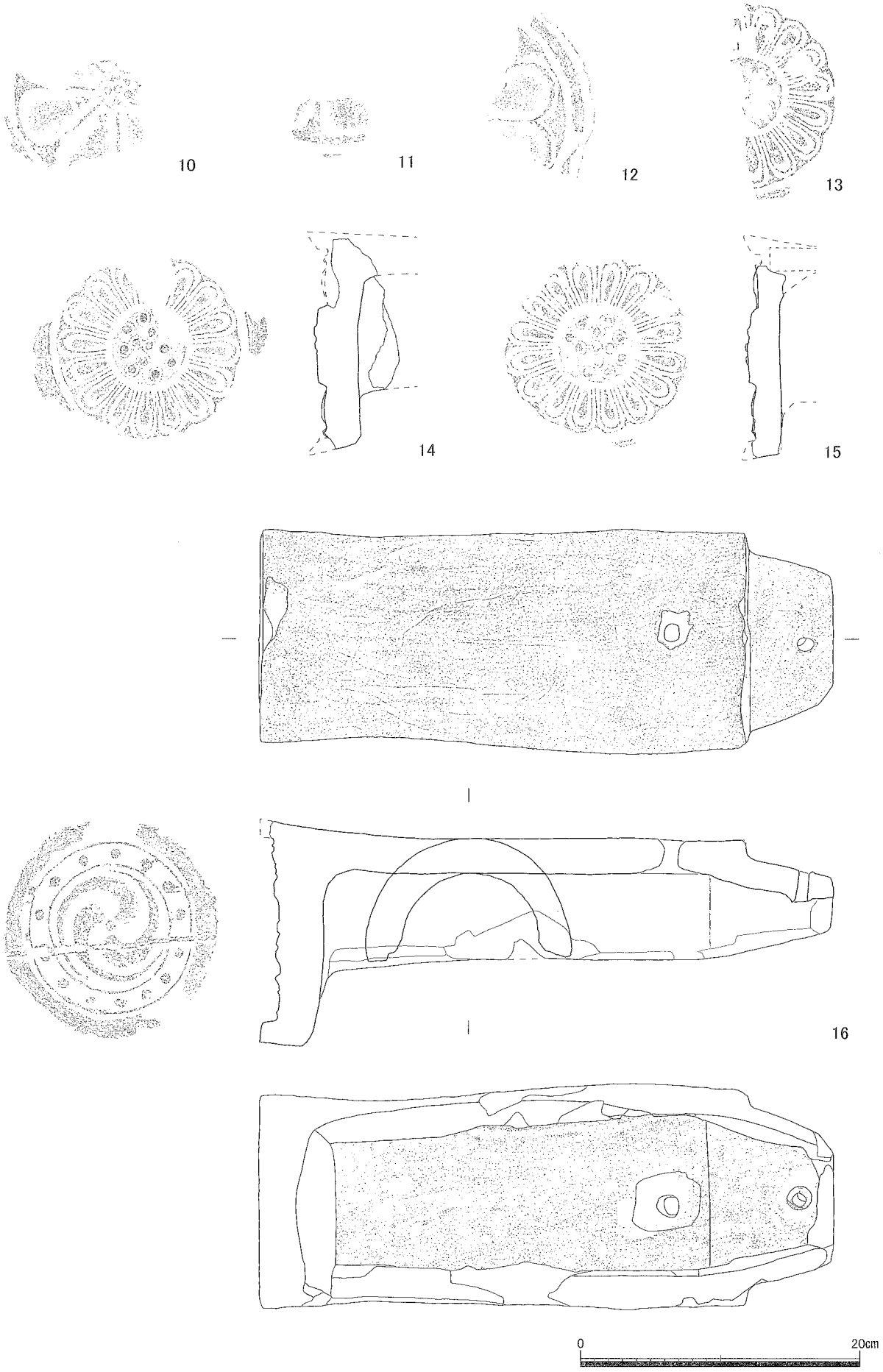


図８　２トレンチⅢ層出土遺物実測図１（1/4）

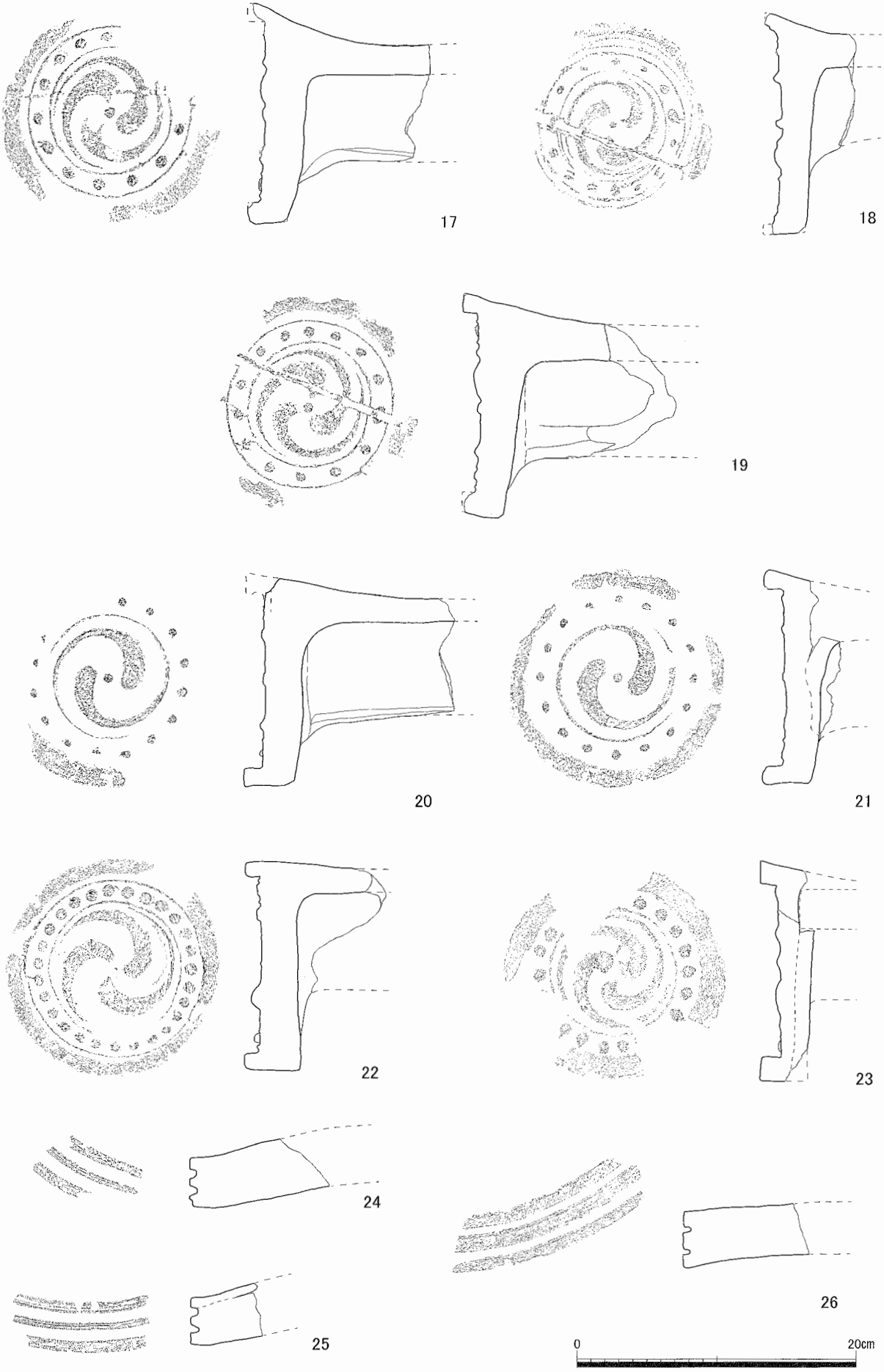


図９　２トレンチⅢ層出土遺物実測図２（1/4）

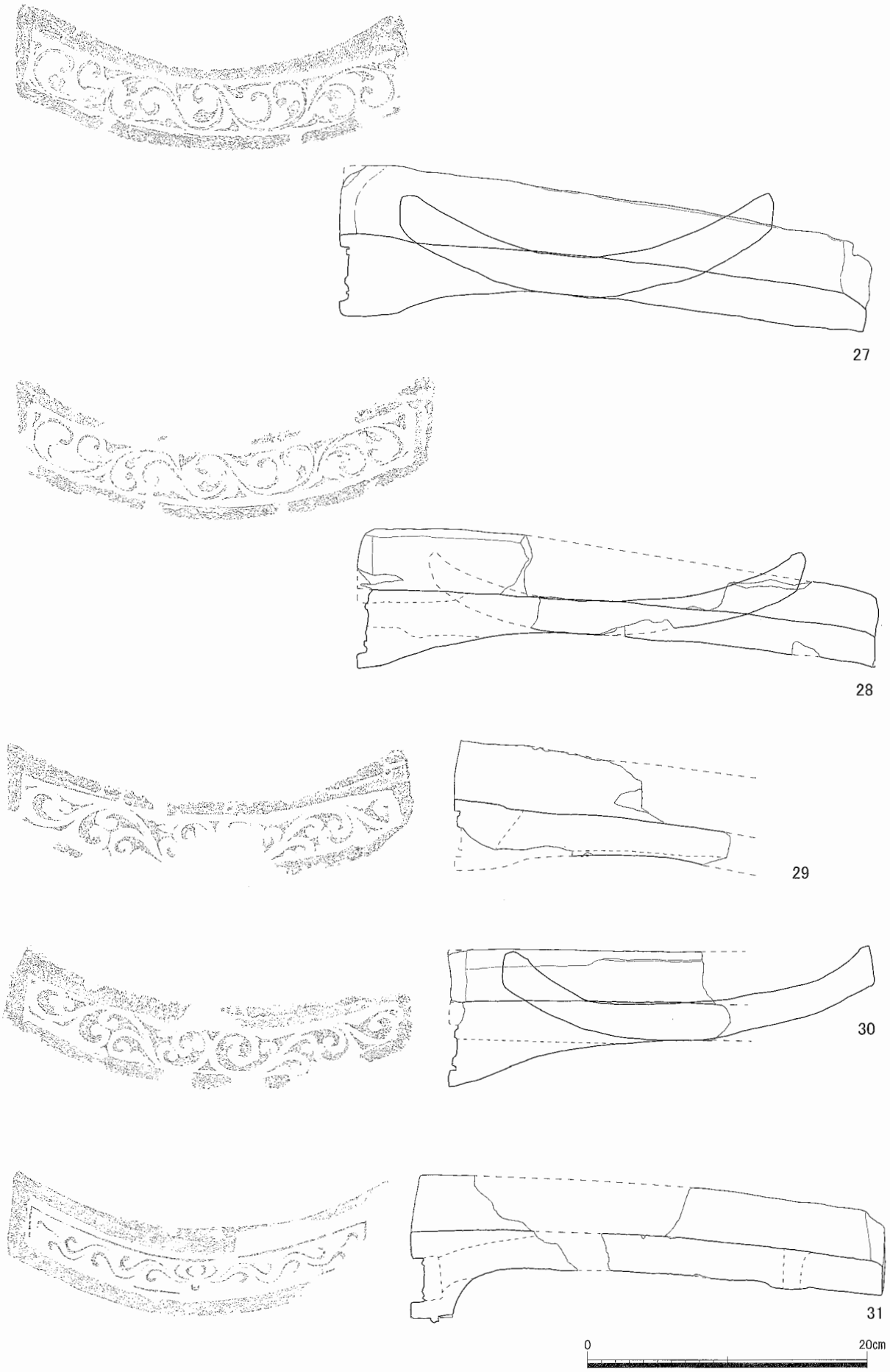


図 10　2 トレンチⅢ層出土遺物実測図 3 （1/4）

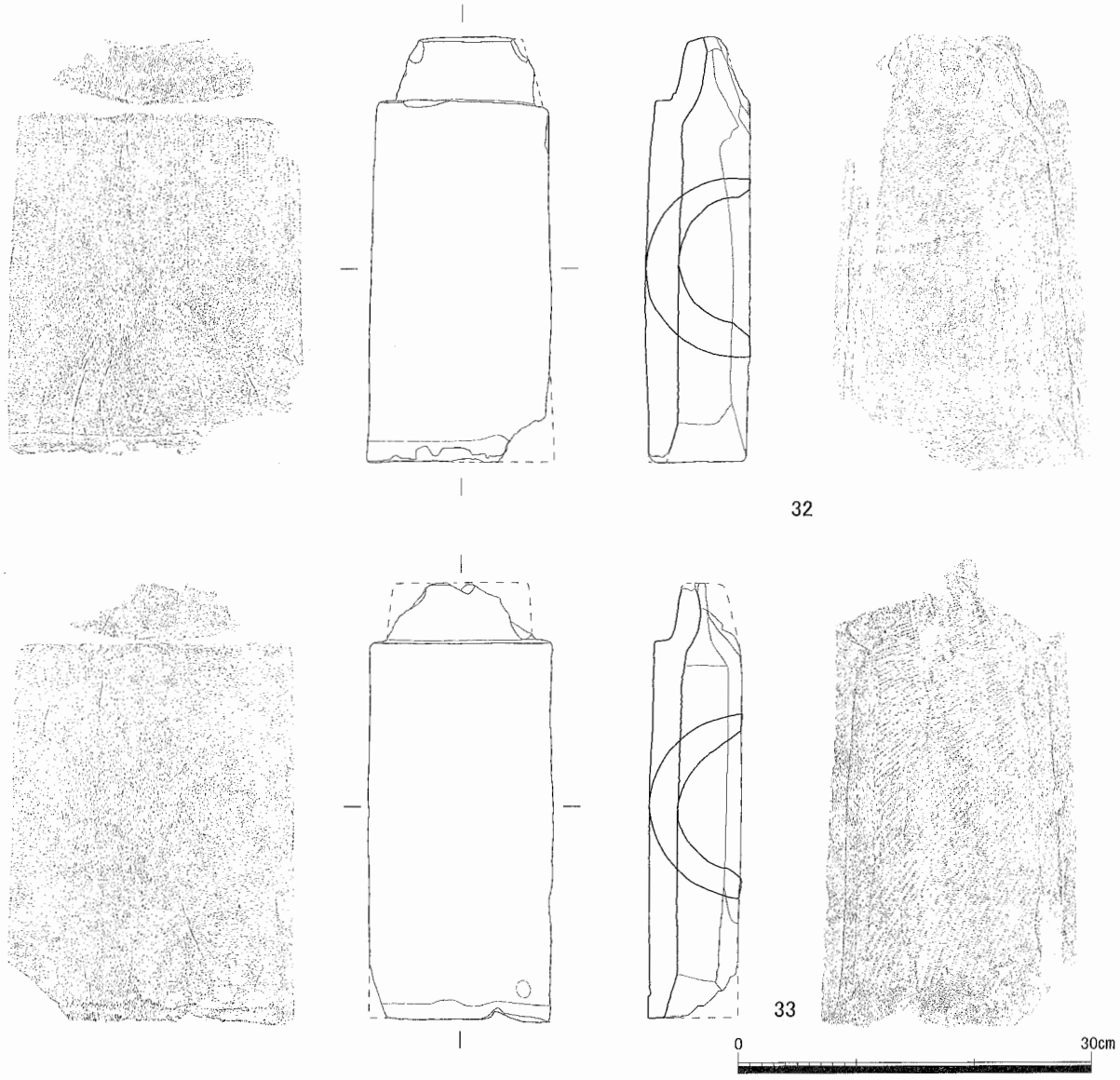


図 11　2トレンチⅢ層出土遺物実測図 4 (1/6)

cm、色調は 5Y4/1 灰色、焼成は堅緻である。

24～26 は三重弧文軒平瓦である。24 は瓦当面の厚さが 3.5 cm、弧線の幅が上段 0.8 cm、中段 0.5 cm、下段 0.7 cm、25 は瓦当の厚さが 3.3 cm、弧線の幅が上段 0.7 cm、中段 0.5 cm、下段 0.7 cmと中段の弧線がやや細いものである。色調は 24 が 2.5Y4/1 黄灰色、25 が 7.5Y4/1 灰色で 2 点とも焼成は堅緻である。26 は瓦当面の厚さが 4.0cm、弧線の幅は上段 1.0 cm、中段 1.3 cm、下段 0.9 cmと中段の幅が太い特徴をもつ。色調は N4/0 灰色、焼成は堅緻である。

27、28 は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦でⅢ層から出土する軒平瓦では個体数が一番多く、片岡王寺跡で同文様の出土例がある。完形品である 27 の法量は全長 37.8 cm、瓦当最大幅 28.2 cm、狭端幅 25.3 cm（復元）、瓦当の厚さ 5.7 cm、顎形態は曲線顎で、凹面には糸切り痕、布目痕がある。側縁と狭端側には面取り、瓦当側には幅 1～2 cmで横方向のナデが施される。凸面は縦方向にナデられており、瓦当面から 4～10 cmの間に朱線の痕跡がある。側面は瓦当側から狭端に向けて複数回のヘラケズリが施されている。色調は 10YR6/2 灰黄褐色、焼成は良好である。28 の瓦当厚は 5.6 cm、瓦当最大幅は 29.5 cm、全長は 37.3cm あり、瓦当部分は平瓦の広端側の凹凸両面に粘土を貼り合わせて厚くしている。色調 5Y6/1 灰色、焼成は良好である。29、30 は唐草文が陰刻で表現される均整唐草文軒平瓦である。片岡王寺跡で同文様の軒平瓦の出土例がある。29 は瓦当最大幅 28.0 cm、瓦当厚は 5.4 cm。瓦当は平瓦の広端面と下半に粘土を付加して作られており、瓦当下半の剥離面には糸切り痕が

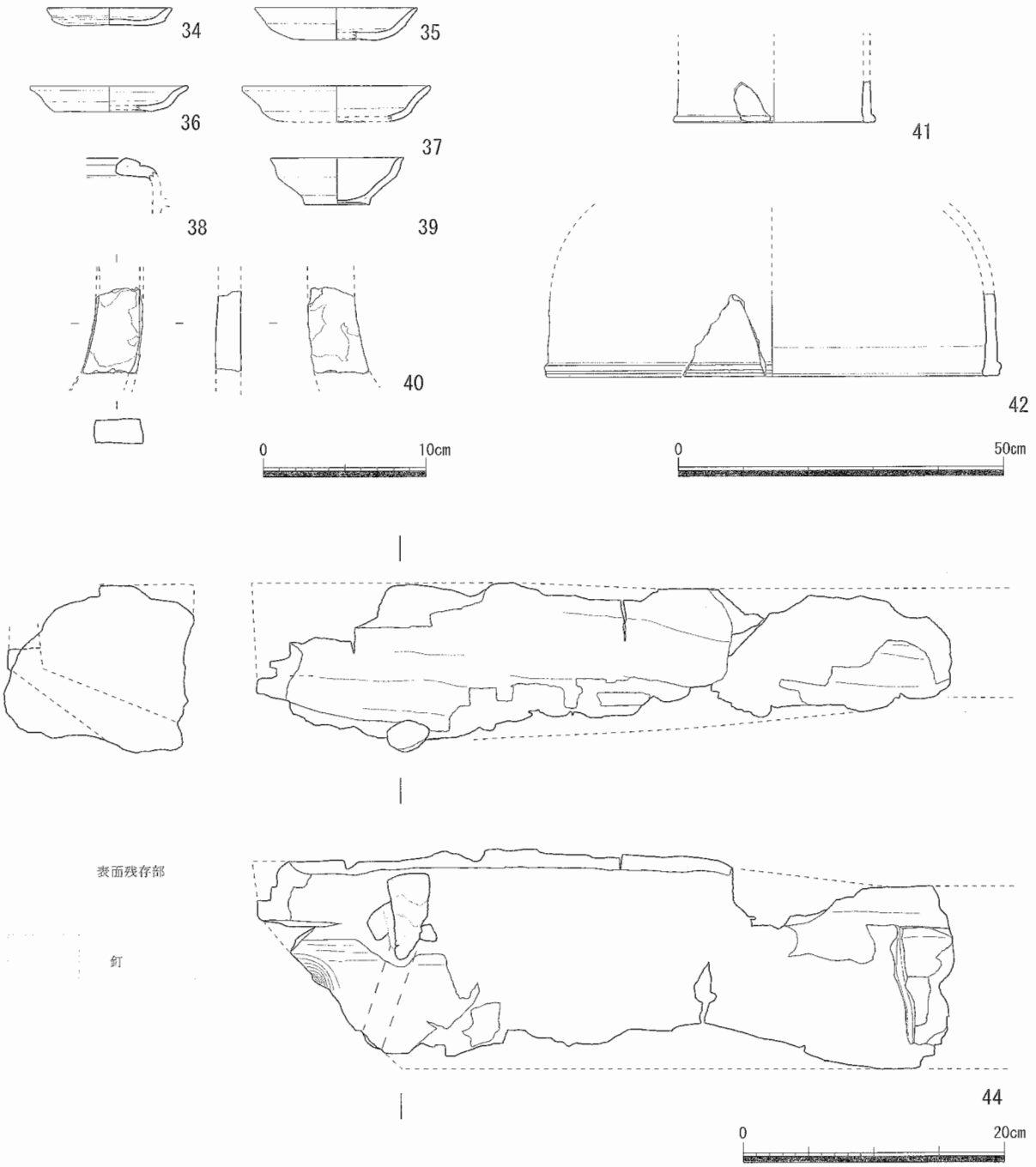


図 12　２トレンチⅢ層出土遺物実測図５（34 ～ 40：1/4、41・42：1/10、44：1/5）

ある。顎形態は曲線顎で顎部分は横方向のナデにより平坦面がある。平瓦部凸面は縦方向のナデ、凹面は糸切り痕、布目痕があり、瓦当面に沿って約４㎝幅の横ナデが施される。色調は 2.5Y5/1 黄灰色、焼成は堅緻である。30 は瓦当最大幅 28.7 ㎝、厚さ 5.8㎝、顎形態は曲線顎である。凸面の顎部分には接合痕を消すように横方向のナデ、平瓦部は縦方向のナデ、凹面には布目痕があり、瓦当、側縁に沿ってナデを施している。色調は 2.5Y5/2 暗灰黄色、焼成は良好である。これら２種は平安後期のものである。

31 は上向きの４葉がある中心飾りでその両脇に唐草文が展開する均整唐草文軒平瓦である。圏線があり、全長 33.8 ㎝、瓦当最大幅 26.7 ㎝、狭端幅 24.1㎝、瓦当の厚さ 6.2 ㎝。顎形態は段顎で狭端側に焼成前に穿たれた釘穴がある。凹面には糸切り痕、布目痕があり、瓦当側には縦方向のケズリが施される。凸面は縦方向の繊維束状の痕が残るナデが施され、離れ砂が付着する。顎廻りは横方向のナデで、顎角の面取りはない。法隆寺 355Ab と文様が似るが本品は圏線が両脇まで残っており、法隆寺例に先行するものかもしれない。室町前期。

32、33は玉縁丸瓦で特徴が共通しており、同時期のものと考えられる。32は全長36.2㎝、玉縁長5.3㎝、胴部幅15.2㎝、胴部高8.9㎝、胴部は筒状で広端側まで幅が一定している。胴部の凸面は縄タタキをナデ消しており、玉縁上半には縄タタキが残る。広端には幅2.0cmの横ナデを施す。凹面には糸切り痕、布目痕があり、側縁凹面側には幅0.8～2.8㎝、広端には幅3.1㎝、玉縁部先端には幅1.3㎝の面取りが施される。色調は5Y6/1灰色、焼成は良好である。33は全長37.1㎝、玉縁長5.1㎝、胴部幅15.7㎝、胴部高7.9㎝、胴部凸面広端部分に指頭圧痕が残る。色調は10YR6/6明黄褐色、焼成は良好である。

34～37は土師器の皿である。34は1/4程度の残存で口径7.5㎝（復元）、器高1.1㎝、色調10YR6/4にぶい黄橙色、胎土は精製されている。13世紀中頃。35は1/4程度の破片で口径9.8㎝（復元）、器高2.0㎝（復元）、色調は5YR6/8橙色で、胎土はわずかに砂粒を含む。14世紀前半。36は口縁がやや外反するもので、口径9.7cm、器高1.6㎝に復元できる。色調は5YR5/6明赤褐色、14世紀中頃。37は36と同様に口縁部が外反し、口縁部のナデにより稜線が認められる。色調は7.5YR6/6橙色、胎土は精製されている。14世紀前半～中頃。38は土師器土釜で大和H型の口縁部。39は小型の瓦器椀である。

40～42は銅製品である。40は幅3.0㎝、残存長5.3㎝、厚さ1.5㎝の破片で側縁がわずかに湾曲している。41は幅約4.8㎝、高さ6.2㎝が残存する破片で、体部の厚さは1.2～1.4㎝、端面は平坦で円弧を描き、外径を31.2㎝に復元できる。端部内面は内湾し、外側に肥厚して1.8㎝の厚みがあり、上端は真直ぐ上方へ延びる。42は最大幅12.7㎝、高さ12.4㎝が残存し、体部の厚さは1.6～1.9㎝、重量1.2kgである。41と同じく端部は円弧を描き、その外径は69.4㎝に復元できる。端面で直立させると上端がやや内傾する。40～42は、塔の南面からの出土ということもあり、相輪金物の可能性が高い。40は水煙、41は擦管、42は伏鉢の破片と考えられる。

43、44は火を受けて炭化した建築部材である。43は塔の基壇外装から南へ1.3ｍの位置で出土した。幅9㎝、残存長45㎝、厚さ18㎝の角材とみられ、トレンチの東壁内に続いている。44はトレンチ中央の西壁にかかる位置で出土した。残存する長さは54.0㎝、幅は12.5㎝、厚さは14.8㎝で、表面まで残存する部分は少なく、片端は斜めに切断されているようにみえる。材には打ち込まれた釘の頭が認められ、途中で屈曲し、釘先は欠損している。両材ともよく燃えており、用途を推定することができない。

Ⅳ 層　45は中房の蓮子1＋4＋8、外縁が三角縁の単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当径の短径が16.0㎝（復元）、長径が17.1㎝で楕円形となっている。瓦当の厚さは2.1㎝。瓦当裏面は螺旋を描くようにナデている。接合する丸瓦は行基丸瓦で、胴部には焼成前に穿孔した釘穴があり、丸瓦の先端を加工することなく接合させている。凸面は広端から狭端へ斜めにナデあげ、凹面には布目痕と縦方向のナデつけた痕があり、側縁の凹面側には面取りがある。色調はN4/0灰色、焼成は堅緻である。46は忍冬蓮華文軒丸瓦、瓦当径は17.5㎝（復元）で、瓦当の厚さ1.7㎝。中房を巡る溝の中には、中房の下の位置に一条の凸線状の笵傷が認められる。色調は5Y5/2灰オリーブ色、焼成は良好である。47は瓦当文様に梵字「𑖭」を使用する。瓦当径は15.8㎝（復元）、厚さ3.0㎝、外縁幅は0.8㎝である。外区には幅0.9㎝の溝とその中央に凸線が巡り、溝内には笵傷がある。色調は2.5Y7/3浅黄色、焼成は良好である。48は20、21と同文の二頭左巻巴文軒丸瓦である。色調は5Y6/1灰色、焼成は良好である。

49、50は桶巻作りの三重弧文軒平瓦である。49は瓦当幅31.3㎝（復元）、厚さ4.1cm、中段の弧線幅の広いものである。凹面には糸切り痕、密な布目痕、幅3.5～4.4㎝の枠板痕跡がある。凸面には不整方向のナデを行い、側縁は複数回の面取りが行われる。色調はN4/0灰色、焼成は堅緻である。50は瓦当の厚さ3.4㎝。弧線の幅は上段1.0cm、中段0.6㎝、下段1.0㎝と中段の弧線が細い。全長41.5㎝、狭端幅27.0㎝。凹面には糸切り痕、布目痕、指頭圧痕があり、凸面には丁寧なナデ、側縁は複数回のヘラケズリが施される。色調は5Y6/1灰色、焼成は堅緻である。51は片岡王寺式といわれる均整唐草文軒平瓦である。これまで採集資料として報告されてい

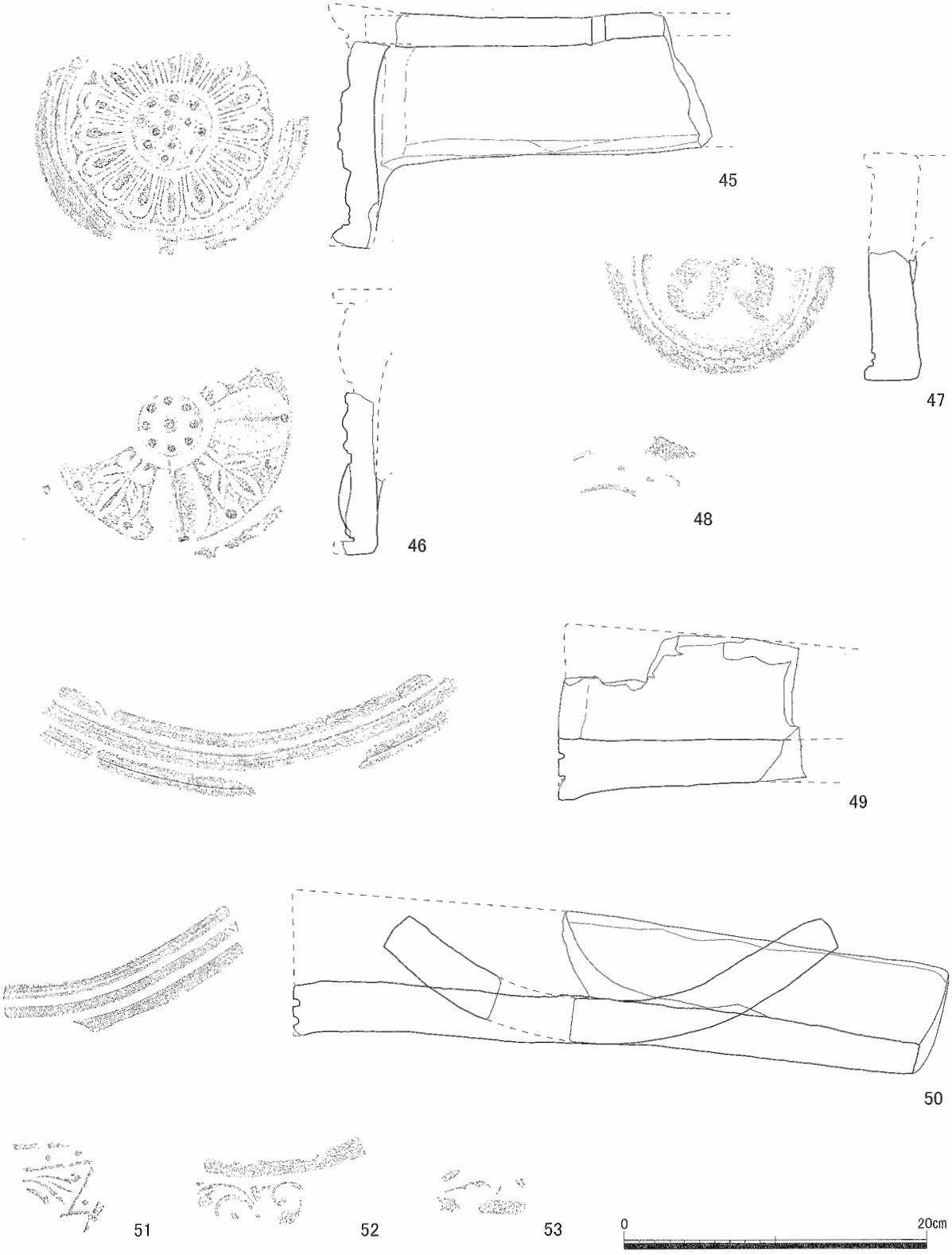


図 13　2トレンチⅣ層出土遺物実測図 1 (1/4)

たが、発掘調査で初めて確認できた。色調は 7.5Y7/1 灰白色、焼成は良好である。52 は中心飾りのない均整唐草文軒平瓦。色調は5Y6/1 灰色、焼成は良好である。53 は唐草文が陰刻される均整唐草文軒平瓦で、色調は 2.5Y6/1 黄灰色、焼成は良好である。

54 は行基丸瓦で長さが 41.0 cm残存し、広端の幅は 19.1 cm、高さ 15.8 cmである。凸面は摩滅、凹面には糸切り痕、布目痕があり、右側縁凹面側は面取りされている。10YR8/1 灰白色、焼成は良好である。模骨に巻きつけた粘土板の接合面で剥離している。

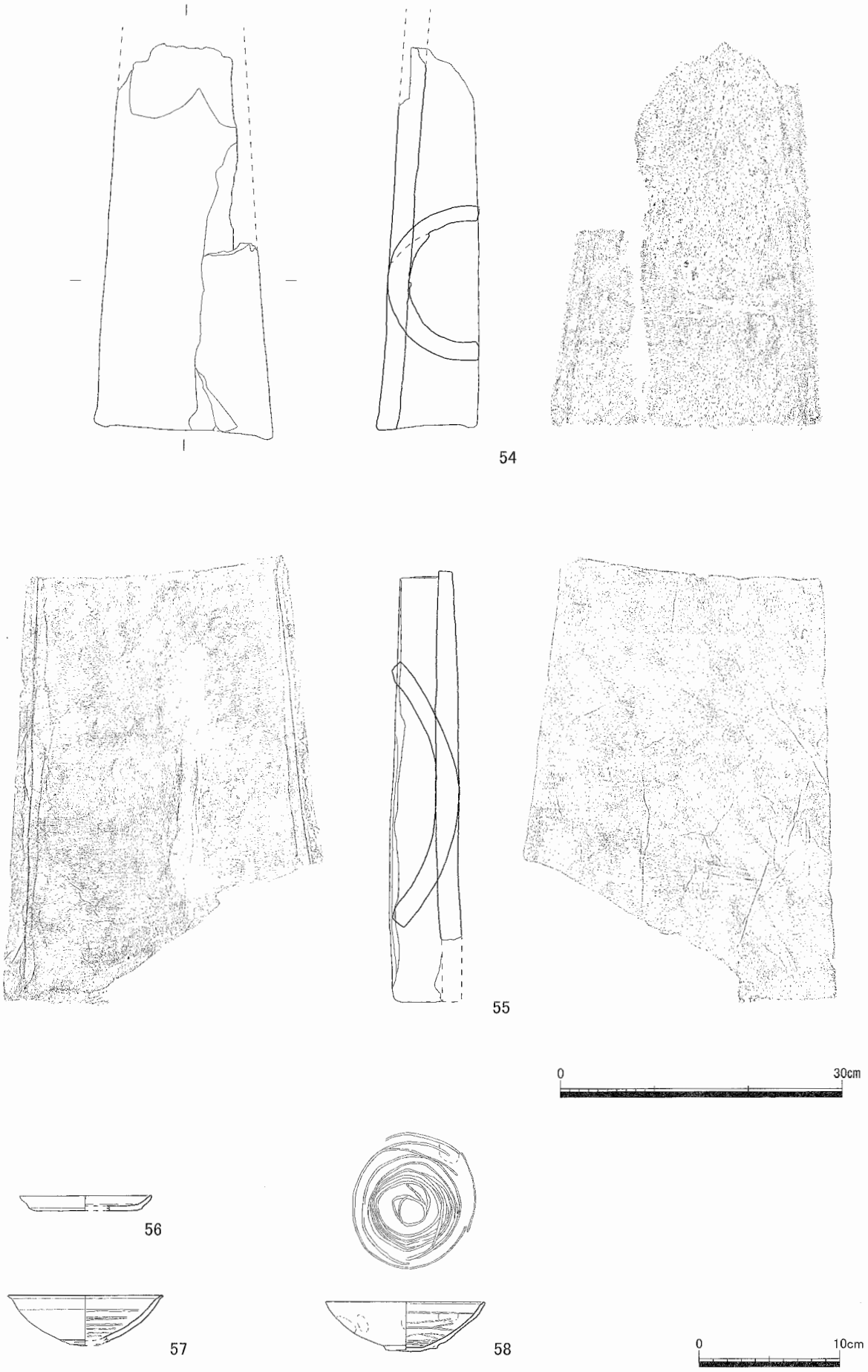


図 14　2トレンチⅣ層出土遺物実測図２（54・55：1/6、50 ～ 58：1/4）

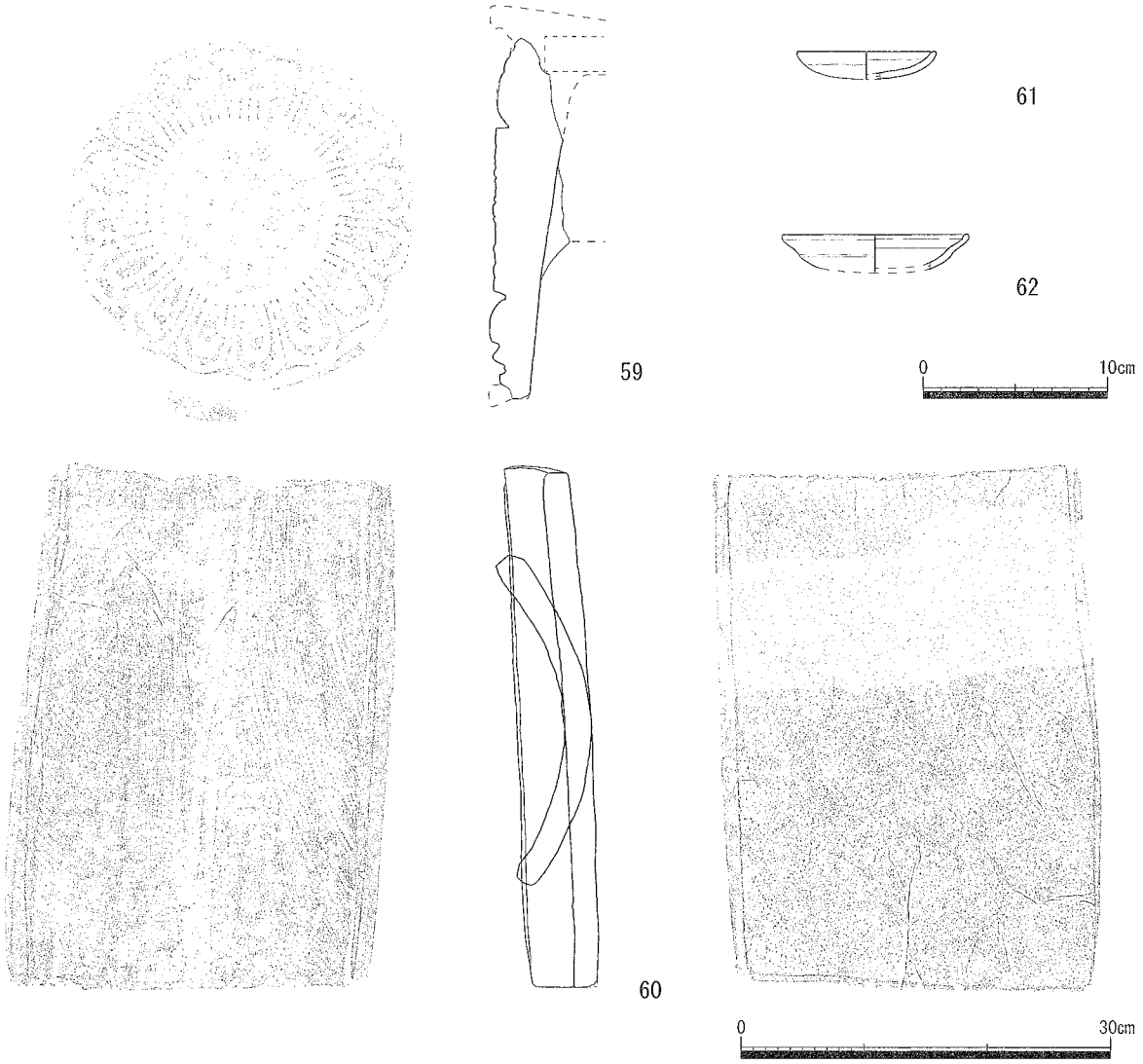


図 15　2トレンチⅤ層出土遺物実測図（59 ～ 62：1/4、60：1/6）

55 は桶巻作りの平瓦で、全長 46.0 cm、狭端幅 25.0 cm、厚さ 1.6 ～ 2.5 cmある。凸面は板状工具による横方向のナデ、凹面には布目痕がある。右側縁は破断面が残り、左側縁は破断面を面取りしている。側縁凹面側には面取りが施される。色調は N5/0 灰色、焼成は良好である。

56 は平坦な底部と体部の立ち上がりに段のある土師器皿で、色調は 5YR7/6 橙色、胎土は精製されている。直径 9.2 cm、器高 1.1 cmに復元できる。13 世紀中頃～末。57、58 は内面に間隔の粗い渦巻状の暗文を施した瓦器椀である。色調は N8/0 灰白色。57 の口縁端部は外反し、内側に沈線が巡る。58 は体部に押捺痕がみられ、小さな貼り付け高台で底部が突出する。13 世紀後葉～ 14 世紀前葉のものである。

Ⅴ 層　59 は中房径が 8.9 cmと大きい中房蓮子 1 + 8 +16 の単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は 21.7 cm（復元）、厚さ 3.0 cm、色調 N5/0 灰色、焼成は堅緻である。60 は桶巻作り平瓦で全長 42.0 cmで、厚さは 2.2cm と薄い。広端幅 26.3cm、狭端幅 24.9 cmと両端の差が少なく、円筒形の桶を使用したとみられる。凹面には糸切り痕、布目痕、幅 4.5 cmの枠板痕跡があり、中央の幅 4.2 cmの間には広端から狭端への縦方向のナデがある。凸面は丁寧な斜め方向のナデ、側縁はヘラ切りで凹凸両面に面取りがある。色調は N7/0 灰色、焼成は堅緻である。

61、62 は土師器皿である。61 の口縁は丸く収まり、色調は 5YR6/6 橙色。62 は底部を欠損しているが、体部に屈曲があり、口縁がやや内湾する。胎土は精製されており、色調は 7.5YR7/4 にぶい橙色で、11 世紀末から 12 世紀前葉のものである。

第3章　まとめ

回廊・門　塔の南では、東西方向に延びる南回廊と回廊内側の雨落溝を検出した。平成26年（2014）度の第3次調査では、南回廊の検出位置から南へ約6.5ｍの地点で調査を実施している（2トレンチ）。そこでは、南回廊の検出面よりも低い位置で瓦を含む粘土、砂層の堆積と湧水を確認しており、南側の山裾に沿って谷が通っていることが推測できる。東回廊の基壇幅4.8ｍを参考にすれば、南回廊に中門を建立し、参道を設置することは地形的に無理がある。

南回廊の検出面積がわずかであったため、基壇面では遺構を確認することはできず、上屋については不明である。しかし、回廊の周囲の中世整地土からは瓦が多量に出土することから、回廊には瓦が葺かれていたことが予想される。境内の南東、回廊の南東角を推定する水田は、回廊基壇検出面よりも標高が高く、遺構の残りが良いことが予測され、基壇上の遺構を確認できる可能性は高い。

西回廊が想定される位置では、回廊基壇、門の遺構を確認することはできなかった。西安寺跡の地形は堂塔の西側の標高が低く、回廊、門を設置するためには、盛土による整地をして基壇を築かなくてはならない。部分的ではあるが、古代の整地土が残存することが確認されたので、伽藍を整備する造成が行われていたことは確かである。西面する伽藍配置も推定されているが、金堂基壇の西面（第8次調査3トレンチ）、第6次調査1、3トレンチと第10次調査1トレンチの調査結果から堂塔の西側は全体的に削平を受けていることが判明しており、堂塔の西側で遺構を確認することは難しいだろう。

塔　第3、7、10次と塔跡の調査を行った結果、塔の基壇上では、心礎の抜取穴、四天柱の礎石抜取穴および据付穴、東面の側柱礎石3個と礎石抜取穴1基を確認している。基壇の西半は削平されており、西面の柱列と基壇外装の残存状態はわずかなものと予想される。第9次調査で伽藍の中軸線が明らかとなり、これまでに確認している東面、北面の乱石積基壇外装に加え、第10次調査では南面の乱石積基壇外装を確認できたことから、塔の情報が更新できた。

造営尺は残る礎石間の寸法から1尺30.0㎝として、柱間1間2.25m(7.5尺)の三間等間、一辺6.75ｍの建物で、基壇の規模は南北の外装基底で計測し、一辺13.2ｍ（44尺）である。花崗岩を主体とした乱石積基壇は、石積みに緩みがあるものの、北面、南面は特によく残っており、石積みの最上段に凝灰岩を用いている。東、南面で階段の遺構は確認できていない。基壇外周では明確な雨落溝の施設はなかったが、北東部で検出した犬走り状のテラスと足場穴、南面基壇外周での雨垂れ痕跡の位置がほぼ一致している。塔の創建瓦は中房蓮子1＋4＋8の単弁16弁蓮華文軒丸瓦と中段弧線の太い三重弧文軒平瓦で、地上式の心礎を持つことから7世紀末から8世紀初頭を創建時期とすることは変わらない。

検出した遺構と塔の埋没状況からその後の塔の変遷を辿ってみると、塔の南面では古代の間に基壇外周の整地が2度行われている。中房蓮子1＋8の単弁16弁蓮華文軒丸瓦はその頃に使用されたものだろう。その後、回廊雨落溝の埋没を経て基壇外周が埋没する。その時期は、上下の層から13世紀代と考えられる。一方、塔の北面では、金堂の廃絶に伴い基壇外周が埋没し、その時期は13世紀後葉～14世紀前葉（第7次Ⅷ層）である。これまで平安後期、室町時代の軒先瓦は塔の所用瓦と考えて来なかったが、今回の焼土混じりの堆積層（2トレンチⅢ層）からの瓦の出土状況を見ると、これらの瓦は塔に所用されたものと考えられ、金堂の廃絶前、平安後期の瓦による修理が行われていたとみられる。第7次調査で塔基壇外周の瓦の出土が少なかったのは、金堂廃絶による基壇外周の埋没の時には、塔は損傷を受けなかったと考えられる。

その後、塔の基壇北面は、金堂の廃絶後に金堂、塔の間に堆積する水成砂層（第7次Ⅶ層）によって、50㎝程埋没しており、その時期は出土遺物から14世紀と考えられる。塔の南面では人為的な整地（2トレンチⅣ層）が行われており、その年代は出土した瓦器椀から14世紀前半である。塔北面の水成砂層と南面の整地土の前後

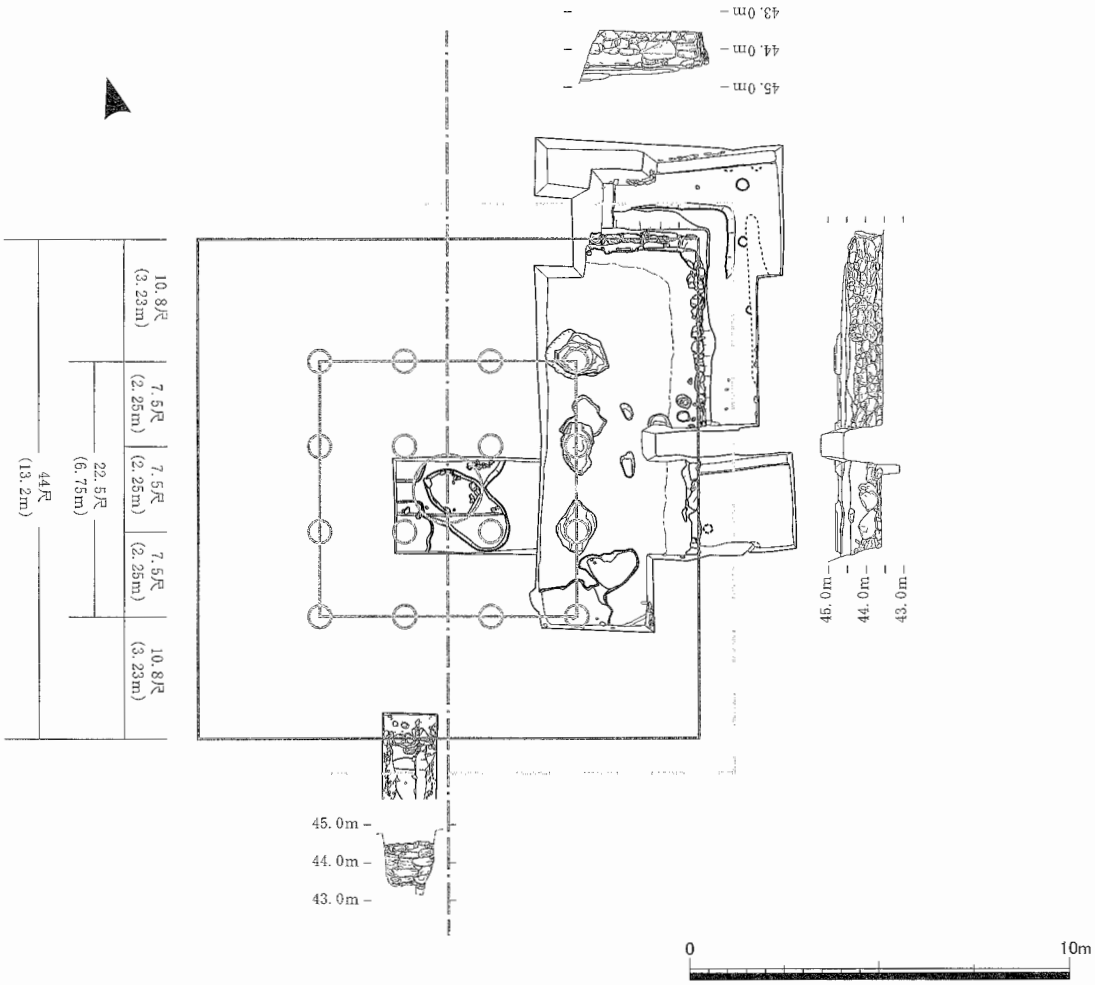


図 16　塔検出遺構平面図・基壇外装立面図・復元図（1/200）

関係は不明であるが、両層の上面の標高差は 10 cm内外で、水成砂層（第７次Ⅶ層）の上面では、土坑を確認しており、平安後期につぐ、室町前期の修復時の基壇外周と考えられる。これ以降の瓦は少量ではあるが室町中期のものの出土をみることから、塔は 15 世紀頃までは存続していたものと考えられる。

塔基壇上に堆積する炭層（第７次Ⅵ層）と基壇南面の焼土混じりの堆積層（２トレンチⅢ層）は、その堆積状況と瓦、炭、焼土、炭化材などの出土遺物から一連のものと考えられる。塔で火災があったのは確かであるが、火災で廃絶したのか廃絶後に燃えたのかは、もう少し検証が必要である。

西安寺の衰退　西安寺が片岡王寺とともに興福寺一乗院の末寺となっていることは、弘安５年（1282）から書かれた『簡要類聚鈔』の記載によって知ることができる。片岡王寺跡でも平安後期の西安寺と同文の軒先瓦が出土することから平安後期の塔の修理、金堂が倒壊した頃には、すでに一乗院の末寺であったのだろう。貞和３年（1347）の「興福寺造営料大和国八郡段米田数并済否注進状」、応永６年（1399）「興福寺造営料大和国八郡段米田数注進状」には放光寺、西安寺、清水別所、弘導寺と並べ記載されているが、その後の応永 32 年（1425）の「一乗院昭円講師反銭納帳」には放光寺、清水別所、弘導寺と西安寺は記載されていない。このことは、西安寺の廃絶の時期を示すものではないが、発掘調査の成果と合わせると西安寺が衰退する時期と考えられる。

今後の調査　今回の調査では、伽藍の西と南の状況を確認し、塔について新たな情報を得ることができたが、伽藍の向きを明らかにするという目的を達成することはできなかった。これまでの調査で、西安寺の伽藍配置は地形の制約を受けていることが予想され、伽藍が北面する可能性も考えられるようになっている。史跡指定を受けている舟戸神社境内の中で調査を行う箇所は限られる状況であるが、次年度は金堂北面の基壇外装の調査を行い、北向きの伽藍配置であるのかを確認する予定である。

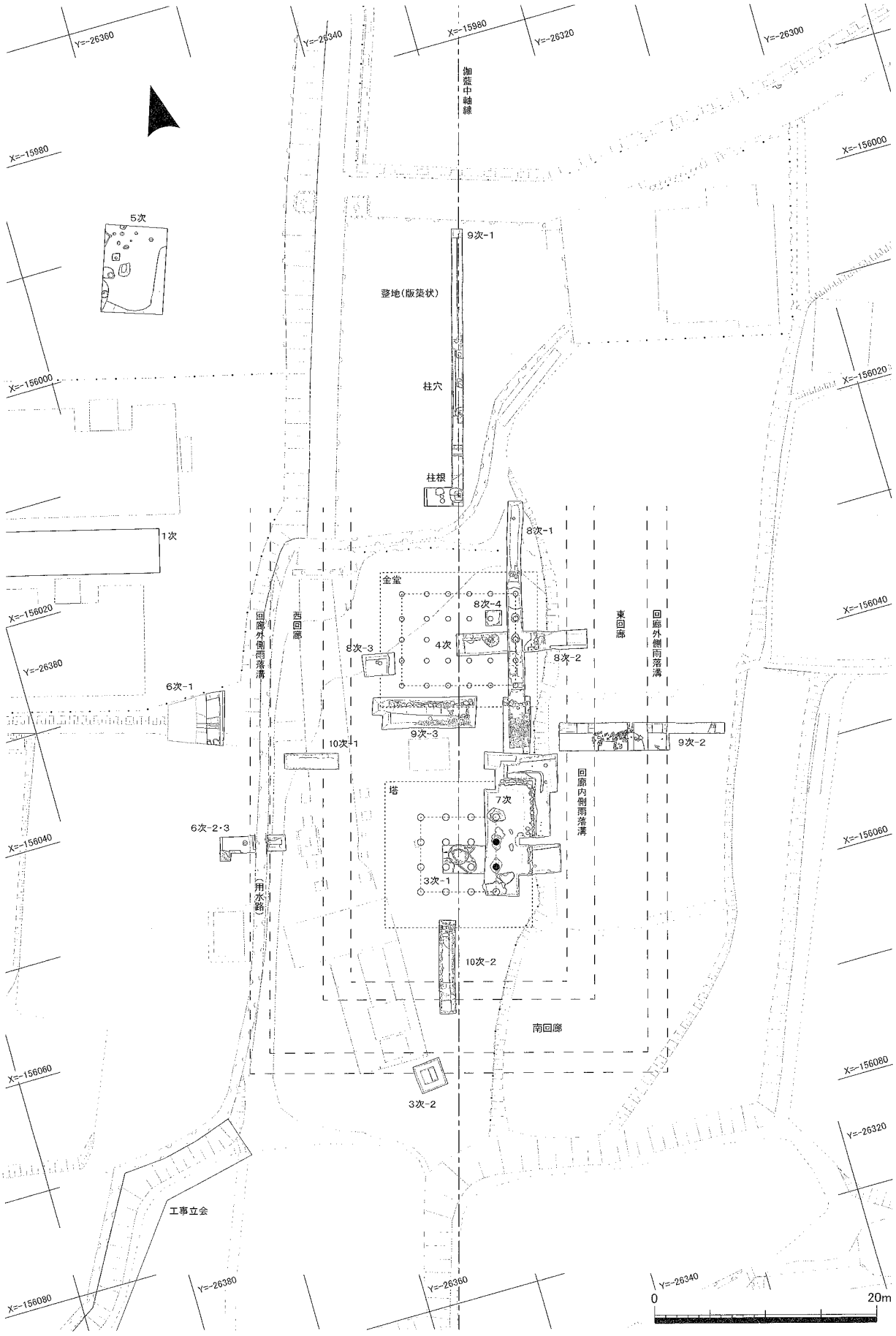


図 17　伽藍想定図（1/500）

写真図版1　1トレンチ

調査前（東から）

地山検出状況（東から）

北壁・東壁土層断面
（南西から）

写真図版２　２トレンチ

調査前（北から）

Ⅲ層堆積状況・炭化材１
検出状況（南西から）

Ⅲ層炭化材２検出状況
（北東から）

Ⅳ層検出状況（北から）

Ⅳ層検出時の基壇外装
（南から）

Ⅴ層検出状況（北から）

基壇外装検出状況（東から）

基壇外装検出状況（南から）

遺構検出状況（北西から）

写真図版6　2トレンチ

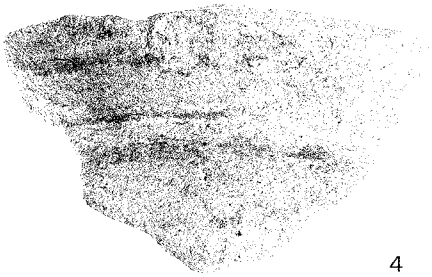
回廊基壇・雨落溝検出状況
（北西から）

回廊基壇・雨落溝検出状況
（北から）

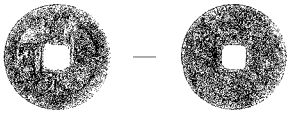
写真図版7　1トレンチ・2トレンチⅢ層　出土遺物

1

3

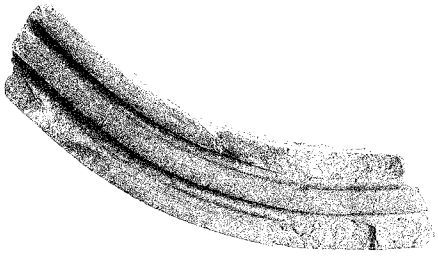

4

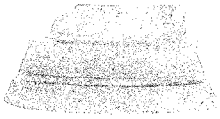
2


8

9

5

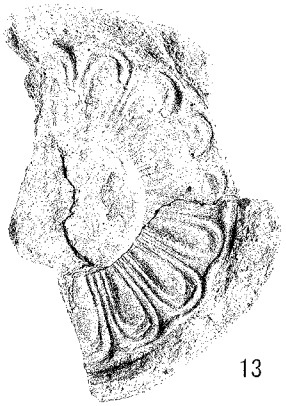

7


6

10

11

12


13

14

15

写真図版８　２トレンチⅢ層　出土遺物

16

17

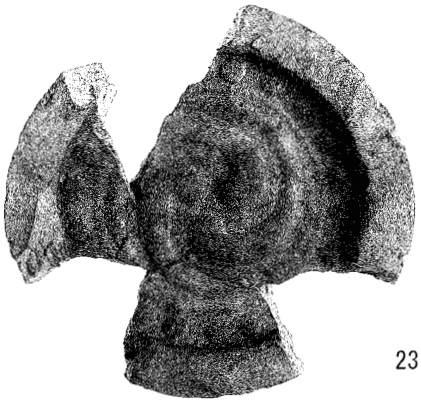
18

19

20

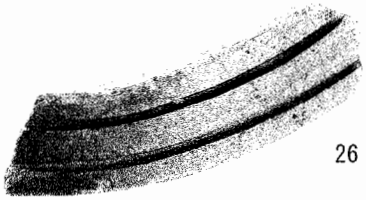
21

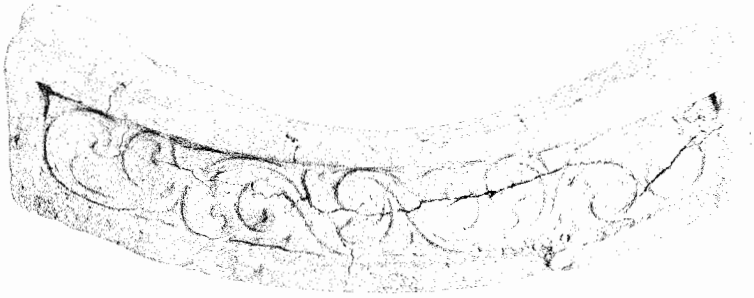
22


23

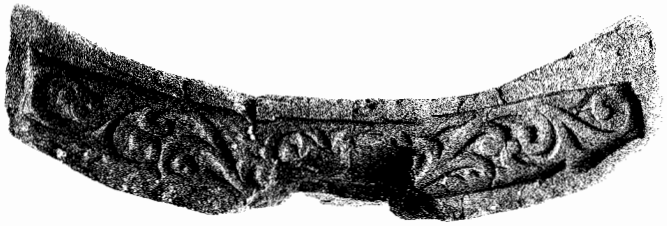
24

25

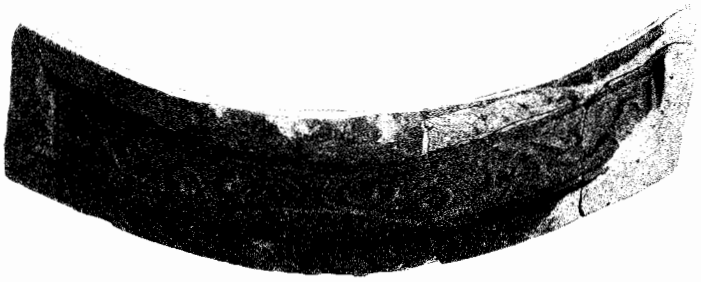

26


27

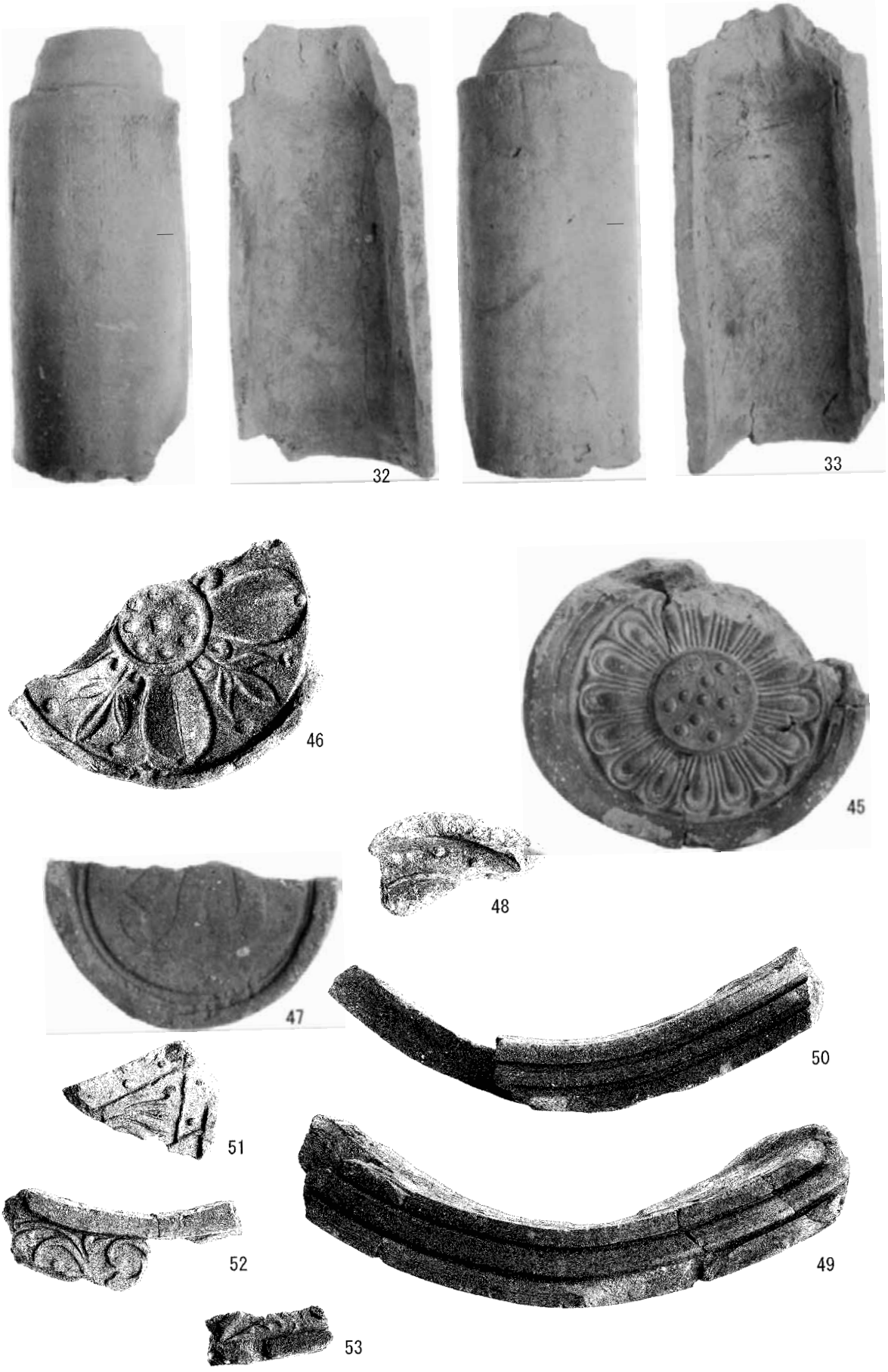
28


29

30


31

写真図版10　2トレンチⅢ・Ⅳ層　出土遺物



54

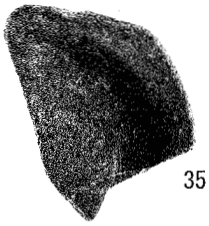
55

写真図版12　2トレンチⅤ・Ⅲ層　出土遺物

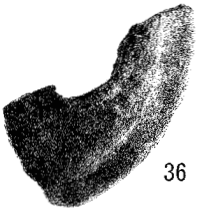
59

60

34

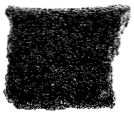


35



36

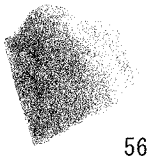
37



38

39

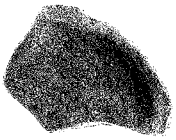
写真図版13　2トレンチⅢ～Ⅴ層　出土遺物



56

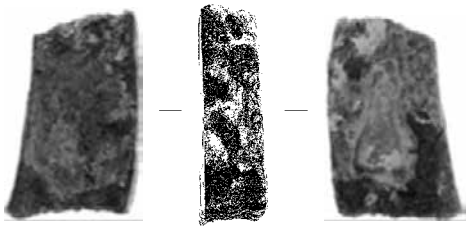
57

58

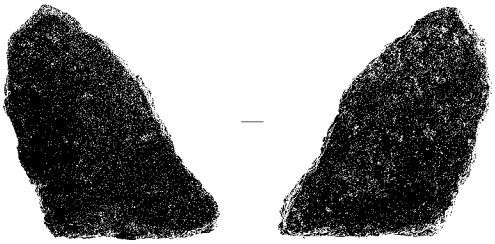


61

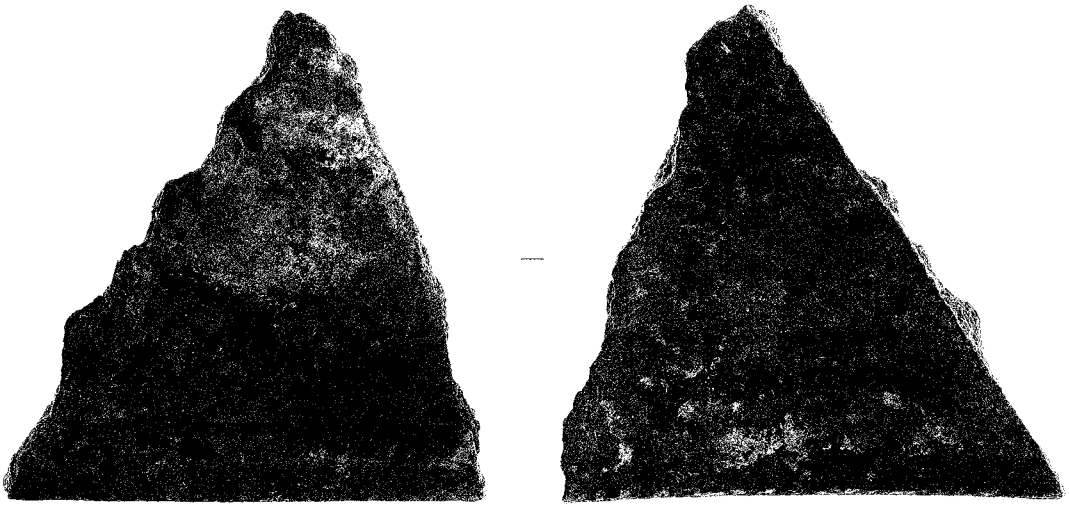
62



40

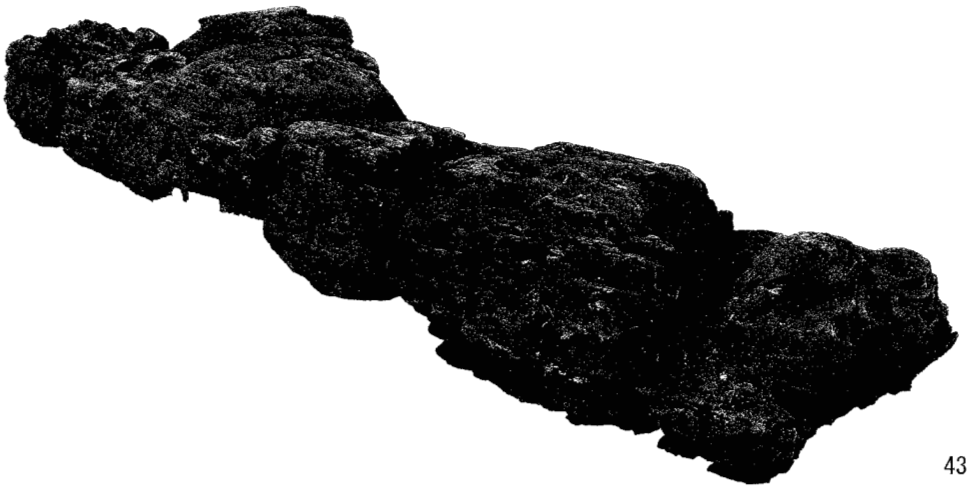


41



42

写真図版14　2トレンチⅢ層　出土遺物



43

44

報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい10じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	西安寺跡第10次発掘調査報告書
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	櫻井恵
編集機関	王寺町
所在地	〒636-0002　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番23号
発行年月日	令和４（西暦2022）年３月29日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
西安寺跡（第10次）	奈良県北葛城郡王寺町舟戸２丁目	29425	10B1	34°35′35″	135°42′46″	2020.11.9～12.17	20㎡	範囲確認

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西安寺跡（第10次）	寺院	古代～中世	塔、乱石積基壇外装、南回廊、雨落溝	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、焼土、土師器、須恵器、瓦器、炭化材、相輪部材	塔南面の乱石積基壇外装を検出。調査区は塔の中央間に位置していたが、階段の遺構は無かった。また、南回廊基壇、回廊内側の雨落溝を検出した。西回廊が推定される箇所は削平を受けており、遺構を確認することはできなかった。

西安寺跡第10次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書　第17集

2022年3月29日

編　集　　王　寺　町
発　行　　奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号

印　刷　　株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地